

東京白楊だより

第28号
平成17.8.1
(2005年)



白楊ヶ丘同窓会東京支部

旧制函館中学校
函館中部高等学校

ホームページアドレス <http://www.hotweb.or.jp/hakuyou/>



支部長ご挨拶



白楊ヶ丘同窓会東京支部長

金子 公彦

61期(昭和34年卒)

皆さん お変わりなくお元気にお過ごしのことと拝察致しております。

支部長を拝命してから丸2年が経過致しました。私に課せられた課題は、同窓会の運営等に関する構造改革と活性化であります。古き良き伝統も時と場合によっては、大きなイナーシアになり、なかなか舵が取れない場合もあります。しかしながら、関係各位の非常なご協力・ご努力により、少しずつではありますが成果も出始めております。例えば、会員相互間のコミュニケーションと活性化を図る一助となりますホームページも長年全く手が入っておりませんでした。新ホームページの立ち上げも完了し、工事中が無くなりました。しかし、これも次の新しいバージョンへ向けて再構築を開始致します。また、活性化の基本は、各期の評議員による各期ごとの活性化に掛かっていると言っても過言ではありません。若年層の取り込みや魅力ある会へ持つて行く為に、各種施策を練っておりますが、その具体的な展開に際しても、やはり名簿が重要なツールとなり、また財産でもあります。今回十四年ぶりに東京支部会員名簿を発行する事が出来ました。情報提供などご協力戴きました皆様に感謝申し上げます。長年の空白期間もあり、今回は空欄や不明者も多々ありますが、これを機会に皆様には相互連絡を計り充実化を図って戴きたいと思っております。

また、経費につきましてもかなりの削減は図っておりますが、会費納入者の減少で厳しい状況にあります。本会運営の為の会費を一人でも多く納入戴きたく宜しくお願い申し上げます。

なお、本年は創立百十周年記念行事が十月十五日に函館で開催されます。多くの皆様方の参加をお願いし、ご挨拶とさせて頂き戴きます。

「本校の更なる発展を目指して」

函館中部高等学校校長 富樫 一憲



白楊ヶ丘同窓会東京支部の皆様には、日頃から本校に対する暖かいご支援と激励を賜り、心より感謝申し上げます。

一 今春の入試状況

函館市は、有力私立高校の存在する地域のため、道内でも公立と私立の激選区となっていました。ところがここ二～三年の間に流れが大きく変わっています。

今春の倍率は、昨年度の一・八倍から一・四倍に下がり受験生は減ったものの、受験・入学辞退者の合計も、大幅に減少してきてお

3年間年間の辞退者数等の推移

	H15	H16	H17
出願者数	389	443	335
倍率	1.6	1.8	1.4
辞退者数(受験+入学)	151	112	83
追加合格者数	30	24	19
2次合格者数	9	0	0
入学者数	240	240	240

ります。補充のための二次募集も昨年より必要がなくなりました。このように、本校に向けて流れる風を維持し、優秀な生徒の確保を目指し努力していきます。

二 SEELHIの取り組み
本校は、文部科学省の「スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール」(SEELHI)に指定されています。

「英語によるコミュニケーション能力」の育成を目指し、3ステップ・システムという本校独自の授業方式の導入など、系統的な指導方法を開発しています。これらの研究成果を全国に発信することで、本校の実践は全国から高い評価を受けています。

今後、二一世紀の英語指導に一石を投じたいと考えています。

三 本校の活性化を目指して
本校の課題の一つは、学校の活性化です。歴史と伝統ある函館中部高校が名実共に渡島の中心校としての地位を築くため、具体的に次の実践に努めています。

人事異動の促進
どんなに力量ある教師でも、同一校に長く勤務すると安易な方向に流れ気力も衰えがちになります。今春は、教頭昇任を含め昨年より多い九名の教職員が異動し、代わって新進気鋭の若手が着任し、

学校は一層活気づきました。「函中だより」の発刊
現在は、公立の伝統校だからといって、黙って中学生が来るのを待つ時代ではなくなりました。これからは、本校の良さを積極的にアピールすることが大切です。そのため、誇るべき実践や生徒の輝かしい活動成果をまとめた学校通信「函中だより」を発行します。保護者・地域・近隣の中学校や学習塾にも積極的に情報を発信し、本校理解の促進に努めます。

「研究紀要」の編集
本校には、力量ある教師がひしめいています。それぞれが具体的な目標を持ち、その達成に向けて取り組んだ意欲的な実践成果を、冊子「研究紀要」に集約し、今年度末の発行を予定しています。内外に誇れる充実した内容となることを確信しております。

四 創立百周年記念事業
さて本年は、創立百十年目にあたり、いよいよ来る十月十五日に創立百周年記念式典を挙げることにいたしました。

白楊ヶ丘同窓会の皆様を中心に百周年記念事業協賛会が設立され、準備が鋭意進められています。この事業の実施にあたりまして皆様の特段のご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

五 終わりに
最後になりますが、白楊ヶ丘同窓会東京支部の皆様には、本校の更なる発展のため、今後とも、強力なご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

「研究紀要」の編集
本校には、力量ある教師がひしめいています。それぞれが具体的な目標を持ち、その達成に向けて取り組んだ意欲的な実践成果を、冊子「研究紀要」に集約し、今年度末の発行を予定しています。内外に誇れる充実した内容となることを確信しております。

四 創立百周年記念事業
さて本年は、創立百十年目にあたり、いよいよ来る十月十五日に創立百周年記念式典を挙げることにいたしました。

白楊ヶ丘同窓会の皆様を中心に百周年記念事業協賛会が設立され、準備が鋭意進められています。この事業の実施にあたりまして皆様の特段のご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

五 終わりに
最後になりますが、白楊ヶ丘同窓会東京支部の皆様には、本校の更なる発展のため、今後とも、強力なご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

函中百周年記念式典及び事業について

創立百周年記念式典が、つい昨日のことに感じられる中、この函館では、百周年記念式典並びに記念事業の準備が熱を帯びてきています。

周年行事の目的は第一に在校生に対する支援です。母校が益々発展するよう、同窓会としてできることを今とりまどめております。次に、本行事を通して、幾多の偉大な先輩諸氏を生んでいる「函中」の存在を全国にアピールすることです。多くの皆様のご支援を、紙面を借りてお願い申し上げます。

現在までの決定事項(含む予定)及び皆様からの寄付金は次の通りです。ご協力ありがとうございました。

なお、引き続き寄付金の受付をしておりますので、よろしくお願ひ致します。

講演・式典・祝賀会

- 一、実施月日 平成十七年十月十五日(土)
- 二、場所 函館市市民体育館(湯ノ川三丁目)
- 三、時間 九時～十時三十分 井上ひさし氏(予定)

- 記念講演 十一時～十二時三十分
- 記念式典 十三時～十五時
- 祝賀会

記念事業

- 一、白楊画会展 十月十三日(木)～十五日(日) 函館市民会館
- 二、校内芸術鑑賞 十二月十五日(木) 函館市芸術ホール
青年劇場「銃口―教師・北森電太の青春」
- 三、白楊吹奏楽団百周年記念演奏会 八月七日(日) 函館市民会館

その他

皆様への詳しいご案内は、七月上旬から始めます。多数のご参加をお待ちしております。

五月末現在の寄付金総額

九百五十万円

白楊ヶ丘同窓会東京支部 第28回親睦大会報告



“心のオアシス東京支部を活力ある集いに”をテーマに、白楊ヶ丘同窓会東京支部の平成16年度「第28回親睦大会」が、10月23日(土)午後5時より、東京・港区北青山の「青山ダイヤモンドホール」で、来賓及び同窓生など220人が参加して行われた。

理事 菅原 大作
65期(昭和38年卒)

大会は、二部構成で行われ、第一部では、佐々木住明氏(第61期・昭和34年卒業)の講演「私の経営観、人生観」が、第二部では懇親パーティとアトラクションとしてジャズの生演奏と女性ボーカリストの唄によるショーが行われた。

第一部の講演会では、藤田美穂子さん(61期)が司会を担当。講演に先立って、「佐々木氏は、23年間増益を続ける世界でもまれに見る優良企業・(株)花王で、1963年の入社以来、研究技術開発部門を一貫して担当されると同時に、海外事業の展開などの発展に多大の貢献をされた」と佐々木氏を紹介。引き続き講演が行われた。

佐々木氏は、「仕事をしていたときは大変忙しかつたが、それで心のゆとりを失わないよう心がけてきた。本日は、仕事で悩み、考え、実行してきたことの一端をお話してみたい」と前置きし、次



盛会だった第28回親睦大会

のように講演した。

「私は、入社以来、会社のためと意識して仕事をしたことは一度もない。家庭も一部犠牲にして仕事をし続けて、自分に何も得られるものがなかった、あるいは自分の身につくものがなかったという悔いを残したくないという信念を通して、常に自分を磨き、自分に役立つ知識や技能を身につけることを第一に考えた。

今や、インターネットが普及し、膨大な知識や情報を簡単に入手できるようになった。しかし、その一方で、日々情報の収集や取得に追われ、立ち止まり余裕を持ってじっくり考えることの大切さを忘れてかけている。仕事や人生の上で、立ち止まり、間を持って考え、判断し、決断、行動することで充実感や達成感が得られ、何ものにも変えがたい感動を生む。

間を取る ということは、立ち止まって物事を根本から考え直す余裕を与えてくれ、発想や着想を豊かにしてくれる。文章には句読点がある。これがなければ文章は意味をなさない。我々の生き方には句読点、音楽での休止符といった“間”が求められている。

私は、若いころから、自分の専門領域以外の人と積極的に交流するようにし、部下にも勧めてきた。研究者は、ともすれば自分の専門分野に没頭しがちであるが、これを打破するために、学際研究の勧めとして、専門領域が異なる人たちとの付き合いや専門外の学会に参加して違った視点から研究に取り組むことを勧めた。同時に、研究室

を大部屋にして色々な分野の研究者が常時交流できるようにした。

花王の研究者の多くは、化学専門だが、医学や科学領域との交流を通じて、多方面の研究開発が行われ、化粧品品のソフィーナや体に脂肪の付きにくい植物油・エコーナ、ヘルシア緑茶などが製品化されている。これらの研究開発の根幹部に学際研究があり、研究開発の活性化につながった。

私は、社内では飛び込み相談役といった立場で非公式の会に出席して話を聞くようにしてきた。公式の会議では、現場からまずいことや失敗談などは出さず、成功例や良い話をしたがる。しかし、非公式の会では率直な発言が出て、仕事の上でのヒントや大胆な発想、大きな決断につながる意見が飛び出すことが多い。そのためにも非公式の会に積極的に参加してきた。

本来人間の能力面に差はない筈だが、これを同業他社と比べると、長い年月が経つに従って企業間格差が出てくる。社員の能力に差がないとすると、仕事に対する情熱の違いといった内面的なもの組織の仕組みや経営の質の違いがあるのではないかと考えている。

内面的なものとしては、仕事に対する熱い思いが社員同士で共有されているかが大きな要素としてあげることができる。私は、研究開発部門の技術系の人の採用に長年携わってきたが、入社希望者は毎年大変多く、その中から選抜されて、優秀ないわゆるエリート中のエリートが入社してきた。しかし、入社後、彼らと接して感じる



ことは、優秀で知識が豊富、仕事をこなす能力は十分だが、共通して何か一つ欠けているところがあつた。それは仕事への意欲や心意気、感動する心といった、精神面での弱さであり、彼らは挫折したときや窮地に追い込まれたときには意外に弱くてもろかつた。

花王は、メーカーであり、経営と研究技術開発は一体で、技術を大切にするという社内風土がある。経営の視点から見れば、技術は最重要課題であり必要条件ではあるが、十分条件とはなり得ない。むしろ社会に信頼されて生き抜いていくための企業特有の内面的なものや、企業を持つ固有の文化に経営の質が問われている。企業文化は、長い間の積み重ねで形成されるだけに、経営の集大成ともいえる。経営の最大課題は、しっかりと企業文化を構築することと、精神面を含めた人材の育成、経営トップのリーダーシップ、の三点が基本になる。

えている課題は、大変大きい。知識を身につける教育は大事だが、本来は社会に出て自立していく素養を身につけることが学校教育の目的であり、学校と家庭、地域社会を含めた三者が一体となつて、知識を身につける以前に学ぶ意欲やどう生きるかに力点を置いた多様な教育プログラムを推進することが強く期待される」と、企業人として実践してきた経験の中から、社員教育と企業経営、教育までを含めた幅広いテーマを講演。聴衆に多くの示唆を与えた。講演の終了後、午後6時より、懇親パーティが開宴された。司会は、80期・岡部あさ子さんと61期・三上和子さんが担当した。最初に、旧制・函館中学校校歌（同窓会歌）、「玄冥の北の一道……」を、52期以前の旧制卒業生が壇上へ上がり、80期・島津路郎氏のピアノ伴奏、63期・土橋道子さんと64期・佐古則興氏の歌唱指導のもとに、出席者全員で合唱。会場内

の雰囲気を感じ上げた。

続いて、支部長の61期・金子公彦氏が、本日の大会ではわれわれ61期がイベント担当としてジャズの演奏やミニ物産展を企画した。今宵は、美味しい料理とお酒を楽しみながら、時間の許す限りご歓談いただきたい」とあいさつした。この後、来賓として出席された富樫一憲函館中部高等学校校長、山内隆陽白楊ヶ丘同窓会長、阿部喜久雄函館市東京事務所長などの方々を紹介した。

来賓を代表して、山内同窓会長が「東京の大会は、毎年熱気にあふれ、うらやましく思っている。来年は、母校創立百十周年。同窓会では、PTAと旧職員会、学校側と協賛会を立ち上げた。式典と祝賀会の実施、記念誌の発行などを企画している」とあいさつした。富樫校長は、「今年四月に着任した。母校の活動で注目すべき点は、文部科学省のスーパースクール（SFC）の指定を受けていることで、今年で二年目に入った。

これは、従来の英語教育では英会話能力が身につかないという反省から、英会話能力向上のための特別プログラムで、高校卒業までに生徒全員に英会話をマスターさせるもので、英会話能力の向上に着々と成果を挙げており全国的にも注目されている。本校は、大学進学率の低迷などの問題点を抱えているが、SFCへの導入を契機に、一層の飛躍を目指したい。本校の校風、白楊魂と、その底流にある自主自立、自由闊達、質実剛健、堅忍不拔、不撓不屈の精神を、在校生にしっかりと植え付けて、たくましく生きる函中健児を育てたい」とあいさつした。

また、阿部函館市東京事務所長は、「函館市は、十二月一日に、近隣の戸井、恵山、榎法華、南茅部の三町一村と合併して、新函館市となる。新しい市は、水産資源を活用して、函館水産・海洋都市構想を進めながら国際観光都市としての成長を目指している。今後

の郷里・函館の動向に注目して欲しい」とあいさつした。この後、二上達也日本将棋連盟顧問のご発声で乾杯し、懇親パーティに移った。

会場内には、例年と同様に、函館市東京事務所寄贈の函館山からの夜景や旧倉庫街から生まれ変わったベイエリアの風景、元町界限などのポスターが多数貼られ、函館の雰囲気を感ぜさせていた。

アトラクションでは、一九六〇年代のヒット曲、ムーンリパーやルート66、テネシーワルツなど懐かしい楽曲のジャズ演奏と女性ボカリストによるステージライブが行われ、会場内の雰囲気をより一層盛り上げた。

一方、ロビーでは、「ふるさと函館の味コーナー」と銘打ったミニ物産展も開催され、故郷の懐かしい味を求める人で賑わっていた。

懇親パーティの最後に、校歌「火柱のはためく峰も……」を全員で合唱し、高校時代を思い返した。校歌斉唱の後、次回大会担当の75期の桑原洋子さんが「来年から、満五十歳の期が大会を担当するようになった。同期の皆と協力して大会を成功させたい」と決意表明した。

そして、大会役員を代表して、石月言成氏（61期）が、閉会の辞を、さらに参加者の中で最も若い酒井道彦氏（88期）らが、音頭を取って三本締めをし、次回の再会を約束して午後8時30分過ぎ終了、散会した。

なお、参加者には、北海道製菓（本社・函館）寄贈のイカ踊りせんべい、クッキー、カンパンセットがお土産としてプレゼントされた。

第28回・東京支部親睦大会出席者一覧

(平成16年10月23日・青山ダイヤモンドホール)

- 昭和8年卒(第35期) 佐藤 洋
- 昭和13年卒(第40期) 今井 清・相馬泰二
- 昭和15年卒(第42期) 宮本寿一
- 昭和16年卒(第43期) 井筒吉彦・家坂孝男・続 豊
- 昭和18年卒(第45期) 池上謹之助・田沼修二
- 昭和19年卒(第46期) 小笠原敏雄・堤口康博
- 昭和20年卒(第48期) 渡辺丞二
- 昭和23・24年卒(第51期) 小野寺吉彦・三國比左男
- 昭和25年卒(第52期) 井上 稔・小泉龍彦
- 昭和26年卒(第53期) 福津達男・二上達也・吉川 進
- 昭和27年卒(第54期) 佐々木順一・多和田裕
- 昭和28年卒(第55期) 阿部 健・栗崎健一・香西 慧
- 昭和30年卒(第57期) 吉田精吾
- 昭和31年卒(第58期) 岩間征一郎・佐藤 健
- 昭和32年卒(第59期) 坪田憲俊・永野 巖・藤原正樹
- 昭和33年卒(第60期) 飯田幸平・上平慶一
- 昭和34年卒(第61期) 伊藤記久子・伊藤政信
- 昭和35年卒(第62期) 荒井 浩・石田公子(一戸)
- 昭和36年卒(第63期) 越後谷宏・小林嘉則
- 昭和37年卒(第64期) 池田 斉・岡本 馨・佐古則興
- 昭和38年卒(第65期) 鈴木三則・徳田定勝
- 昭和39年卒(第66期) 菅原大作・千葉恵寿
- 昭和40年卒(第67期) 水口 武
- 昭和41年卒(第68期) 相馬研二・花海吉夫・松田幹夫
- 昭和42年卒(第69期) 梅田五郎・梅田やよい(上野)
- 昭和43年卒(第70期) 石黒秀喜・大塚幸枝
- 昭和44年卒(第71期) 中村興治
- 昭和45年卒(第72期) 池田英一・加藤哲夫・神垣善一
- 昭和46年卒(第73期) 葛西 浩・山田 朗
- 昭和47年卒(第74期) 厚谷 諭・池田喜久雄
- 昭和48年卒(第75期) 小栗純子・桑原洋子・近藤 薫
- 昭和49年卒(第76期) 林誠之介・吉川忠幸
- 昭和50年卒(第77期) 吉崎 収
- 昭和51年卒(第78期) 岡部あさ子(三浦)・垣坂 清
- 昭和52年卒(第79期) 塚本良子(伊藤)・長澤一徳
- 昭和53年卒(第80期) 成田吉道・松田 司・宮崎恒春
- 昭和54年卒(第81期) 山内清美(藤島)・山平匡人
- 昭和55年卒(第82期) 吉崎加代子(丸山)・若山雅行
- 昭和56年卒(第83期) 西田勢津子(畑野)
- 昭和57年卒(第84期) 片瀬裕己・山本直樹
- 昭和58年卒(第85期) 清水 真
- 昭和59年卒(第86期) 岡川 直・加戸茂樹
- 昭和60年卒(第87期) 酒井道彦
- 昭和61年卒(第88期) 及川博志
- 昭和62年卒(第89期) 朝緑高太
- 昭和63年卒(第90期) 山初順一
- 昭和64年卒(第91期) 土橋道子(山本)・戸村文彦
- 昭和65年卒(第92期) 福本元子(浅間)
- 昭和66年卒(第93期) 池田 斉・岡本 馨・佐古則興
- 昭和67年卒(第94期) 佐々木京子(中村)
- 昭和68年卒(第95期) 鈴木三則・徳田定勝
- 昭和69年卒(第96期) 菅原大作・千葉恵寿
- 昭和70年卒(第97期) 水口 武
- 昭和71年卒(第98期) 相馬研二・花海吉夫・松田幹夫
- 昭和72年卒(第99期) 及能誠一・大河原綾子(小沢)
- 昭和73年卒(第100期) 木戸正文・児玉久美子(中村)
- 昭和74年卒(第101期) 白崎淳一郎
- 昭和75年卒(第102期) 梅田五郎・梅田やよい(上野)
- 昭和76年卒(第103期) 花巻省三・松坂きみえ(柿沢)
- 昭和77年卒(第104期) 山本久恵(沢口)
- 昭和78年卒(第105期) 石黒秀喜・大塚幸枝
- 昭和79年卒(第106期) 佐藤勝義・高橋裕司
- 昭和80年卒(第107期) 中村興治
- 昭和81年卒(第108期) 池田英一・加藤哲夫・神垣善一
- 昭和82年卒(第109期) 菊池佳裕・小林繁治・笹川浩史
- 昭和83年卒(第110期) 佐野香苗(小岡)・丹羽 修
- 昭和84年卒(第111期) 村上 誠一・村田秀樹
- 昭和85年卒(第112期) 葛西 浩・山田 朗
- 昭和86年卒(第113期) 厚谷 諭・池田喜久雄
- 昭和87年卒(第114期) 小栗純子・桑原洋子・近藤 薫
- 昭和88年卒(第115期) 祐川伊佐久・高橋日出樹
- 昭和89年卒(第116期) 林誠之介・吉川忠幸
- 昭和90年卒(第117期) 小林敏秀・白川正広
- 昭和91年卒(第118期) 町原秀臣・山谷真児
- 昭和92年卒(第119期) 吉崎 収
- 昭和93年卒(第120期) 岡部あさ子(三浦)・垣坂 清
- 昭和94年卒(第121期) 塚本良子(伊藤)・長澤一徳
- 昭和95年卒(第122期) 成田吉道・松田 司・宮崎恒春
- 昭和96年卒(第123期) 山内清美(藤島)・山平匡人
- 昭和97年卒(第124期) 吉崎加代子(丸山)・若山雅行
- 昭和98年卒(第125期) 西田勢津子(畑野)
- 昭和99年卒(第126期) 片瀬裕己・山本直樹
- 昭和100年卒(第127期) 清水 真
- 昭和101年卒(第128期) 岡川 直・加戸茂樹
- 昭和102年卒(第129期) 酒井道彦
- 昭和103年卒(第130期) 及川博志
- 昭和104年卒(第131期) 朝緑高太



- 昭和52年卒(第79期) 片瀬裕己・山本直樹
- 昭和53年卒(第80期) 清水 真
- 昭和54年卒(第81期) 岡川 直・加戸茂樹
- 昭和55年卒(第82期) 酒井道彦
- 昭和56年卒(第83期) 及川博志
- 昭和57年卒(第84期) 朝緑高太
- 昭和58年卒(第85期) 山初順一
- 昭和59年卒(第86期) 土橋道子(山本)・戸村文彦
- 昭和60年卒(第87期) 福本元子(浅間)
- 昭和61年卒(第88期) 池田 斉・岡本 馨・佐古則興
- 昭和62年卒(第89期) 佐々木京子(中村)
- 昭和63年卒(第90期) 鈴木三則・徳田定勝
- 昭和64年卒(第91期) 菅原大作・千葉恵寿
- 昭和65年卒(第92期) 水口 武
- 昭和66年卒(第93期) 相馬研二・花海吉夫・松田幹夫
- 昭和67年卒(第94期) 及能誠一・大河原綾子(小沢)
- 昭和68年卒(第95期) 木戸正文・児玉久美子(中村)
- 昭和69年卒(第96期) 白崎淳一郎
- 昭和70年卒(第97期) 梅田五郎・梅田やよい(上野)
- 昭和71年卒(第98期) 花巻省三・松坂きみえ(柿沢)
- 昭和72年卒(第99期) 山本久恵(沢口)
- 昭和73年卒(第100期) 石黒秀喜・大塚幸枝
- 昭和74年卒(第101期) 佐藤勝義・高橋裕司
- 昭和75年卒(第102期) 中村興治
- 昭和76年卒(第103期) 池田英一・加藤哲夫・神垣善一
- 昭和77年卒(第104期) 菊池佳裕・小林繁治・笹川浩史
- 昭和78年卒(第105期) 佐野香苗(小岡)・丹羽 修
- 昭和79年卒(第106期) 村上 誠一・村田秀樹
- 昭和80年卒(第107期) 葛西 浩・山田 朗
- 昭和81年卒(第108期) 厚谷 諭・池田喜久雄
- 昭和82年卒(第109期) 小栗純子・桑原洋子・近藤 薫
- 昭和83年卒(第110期) 祐川伊佐久・高橋日出樹
- 昭和84年卒(第111期) 林誠之介・吉川忠幸
- 昭和85年卒(第112期) 小林敏秀・白川正広
- 昭和86年卒(第113期) 町原秀臣・山谷真児
- 昭和87年卒(第114期) 吉崎 収
- 昭和88年卒(第115期) 岡部あさ子(三浦)・垣坂 清
- 昭和89年卒(第116期) 塚本良子(伊藤)・長澤一徳
- 昭和90年卒(第117期) 成田吉道・松田 司・宮崎恒春
- 昭和91年卒(第118期) 山内清美(藤島)・山平匡人
- 昭和92年卒(第119期) 吉崎加代子(丸山)・若山雅行
- 昭和93年卒(第120期) 西田勢津子(畑野)
- 昭和94年卒(第121期) 片瀬裕己・山本直樹
- 昭和95年卒(第122期) 清水 真
- 昭和96年卒(第123期) 岡川 直・加戸茂樹
- 昭和97年卒(第124期) 酒井道彦
- 昭和98年卒(第125期) 及川博志
- 昭和99年卒(第126期) 朝緑高太



(5) 東京白楊だより

参加者総数
196人

特集記事

孤高の俳人 斎藤玄 私見

その作風と人間像



本庄登志彦 (48期・昭和20年卒)

◎本庄登志彦氏経歴

昭和3年生まれ。北海道大学法経学部経済学科卒。昭和20年、斎藤玄に師事し句作りの道に入る。「壺」「風土」を経て昭和58年双眸俳句会を結成し主宰となる。第30回、第35回角川俳句賞候補作に入選。現在、首都圏の俳句教室講師をつとめている。「俳句は座の文芸であると共に句作は孤の営為、人間生死みな孤り。自分孤りで楽しめる俳句を一人でも多くの方に薦めたい」と信条としている。

私の俳句入門

第十四回蛇笏賞受賞俳人斎藤玄は、昭和五十五年五月八日午前十一時、直腸癌で旭川市唐沢病院にて永眠。法名深信院法玄日俊居士。以前から先師玄について、その作品と実像とのかかわりについて書いてみたいと思っていた。

いま、六十六歳で逝去した師の年齢を超えた時点に佇んで、この念願をぜひ実践しなくてはという心が殊のほか強くなってきた。これまでも、玄に関する評伝風のものはいくつか公刊されてはいるものの、いずれも表面から玄俳句とその背景を論述したものが多く本当の玄の私生活や文人的性

格、言行とのかかわりから作品の底流を探ったものはなかったように記憶している。

私がこれから書いてみたいのは、知られざる玄の私生活風景をバックにしながら、そこより創出された秀句の源泉を尋ねてみようというのが狙いなのである。

昭和二十年頃から昭和二十六年三月、北大法経学部を卒業するまでの間、夏、冬、春の休暇ごとにほとんど玄と起居を共にするようになって過ごした私以外では書くことのできない斎藤玄論を展開してみたいと思う。

まずは、入門当時のことから話を進めてみよう。私の俳句入門は、亡父の半ば強制によるものであ

り、師の選択も亡父と函館文化懇話会で親交のあった斎藤玄を一方的に決めて押し付けたというのが実情であった。

あれは確か旧制高校一年の頃だったと思うが、漸く函館の町にも雪解風が吹き始めた三月下旬、私が当時アルバイトをしていた書籍店「栄文堂」の長女が偶々玄の門下であったので、この人に連れられて始めて春日町の豪邸斎藤家の門をくぐったのである。

通用口よりすぐ上がった所が十畳程のお茶の間で、まん中に大型のストーブがでんと据えられ、その傍らに見るからに上等な和服を着込んだ玄がまさに無愛想を絵に描いたような顔で坐っていた。

「栄文堂」の娘さんに紹介され、玄はじめ十余名の門下の方々到自己紹介をして「どうぞよろしく」と言ったものの、全員の皆さんが軽く会釈を返してくれたのに、玄自身は完全無視、ひと言も声をかけてくれなかった。

恐る恐るもう一度、「先生よろしくお願ひします」と言ってみた。またしても無言無返答。

暫く気まずい沈黙の続いたあとにボツリと玄の言った言葉。

「本気で俳句を作りなさい。やる以上目標を持ちなさい。入門に対し破門はあるが退会はないぞ。分かったか。」

成る程、入門心得としては完璧な垂訓である。さて、句会が始まる。なんにも教えてくれないので左右の先輩の見様見真似で俳句もどきを作るしか仕方がない。

確か 猫の恋 が席題だったと記憶している。そこで、一句怖いものしらずで投句。

恋猫の癖より癖へのび足

いやはや、今見てみると噴飯ものの句であるが、その時は真剣に作った一句なのである。

披讀が始まる。もち論、私の句は誰にも拾って貰えなかった。

最後に玄の講評がある。その時、ひょいと私の句の短冊をつまみ上げた玄が

「なんだこの句は、恋猫が泣いているよ。ハハ、ノンキダネエ」と言いきま、その短冊を揉みくちやにして背後へポンと捨ててしまった。

居並ぶ先輩諸兄姉が爆笑したの

だから、確かにひどい一句であったことは間違いない。

しかし、それにしてもこれから専心句作に努力しようと思っっている新弟子の句を「ハハ、ノンキダネエ」はないであろう。

下手は下手なりに指導してくれてこそ師ではないか。ムラムラと腹が立つてきたので、「先生、この句のどこが悪いのですか」と質問してみました。

「馬鹿者、良い悪い以前の話だ。俳句になつていない」と一喝されてしまった。

いま思えば、誠に玄の発言は至極もつともなことであり反論の余地はないが、生意気盛りの学生であった私には随分と頭にクルルような仕儀を受けたとの印象が強かった。

当日の玄の一句

恋猫の月光浄土横切りぬ

は、流石、月並の恋猫ではなく、しっかりと作者玄の恋猫として把握詠唱されてをり、その句眼の鋭さ、深さに改めて敬服の念を抱かされる。

それにしてもこの玄の人間嫌いととも思える無愛想無口はどこから生じたものであるうか。この謎を



斎藤玄(34期・昭和7年卒)の経歴

大正3年生まれ。早稲田大学商学部卒。本名・利彦。早稲田大学在学中から新興俳句に親しみ西東三鬼に師事。俳誌「壺」を昭和15年に創刊。その後「鶴」の石田波郷に師事し作風が一変する。詩性高くきわめて個性的な独特の世界を展開した。昭和55年句集「雁道」によって、北海道で初の蛇笏賞を受賞したが、その直後病死(昭和55年5月)

解くためには、祖父斎藤又右衛門の嘗んだ斎藤呉服店の隆盛に始まり、父、斎藤俊三に至る富豪の家の光と陰の部分について立入って行かなければならない。

また、異母兄弟であった白鳥一樹についても言及しなければならぬ。このように、かなり私的な恥部にまで筆を進めなければ、玄の画像、原質は理解され難いが、とにかく、玄俳句の秀拔性が、作者玄の性格、人生観と表裏一体を成している以上、勇敢にこの稿を継いで行くしかない。俳句の芯には人間があり、作者の芯に俳句があるといった関係図式を解明してみたい。

——生い立ちと人物——

斎藤玄は、北海道庁立函館中学校(三四期・昭和七年卒)に学び、その後、早稲田大学第一高等学院商科に進学している。仄聞するところによれば、中学校時代は国漢英と文科系の学科には優れた才能を発揮したらしいが理数科はまるきりダメという跛行型の生徒であったらしい。

玄自身の記した 覚書 によると、小学三年で日本外史全巻を白文で習読したり、小学四年で、当時の中学校英語読本ニユークラウンリーダー全五巻を習得、中学時代には、ボードレールを始め、荷風、潤一郎、横光利一、川端康成、高見順、徳田秋声、志賀直哉、芥川龍之介などの作品を耽読したと記していることから察して、玄の文学的土壌はこの小・中学校時代にその大半が形成されたものとみて間違いない。

父、斎藤俊三は、咀華と号した二科会所属の画家。母、栄は能楽に精通し、大叔父には「海潮音」の訳詩で有名な仏文学者上田敏がおり、従兄として俳人杉村聖林子がいた。

ひと口でいえば玄の体内には直系的にも間接的にも、生来、芸術家としての血液が色濃く宿っていたということである。

玄の諸句に見られるその卓抜した達意の句眼、高貴清冽の韻律は、これらの血の優れた世襲的な昇華作用の結果であつたらうし、また私生活に見られた酒、女性、交友にかかわる異常とも思える激烈な言動は、その血の負の作用として読み取ることができるのではあるまいか。

玄は生前、人間関係においても好き嫌いが激しく、男性に対しては、野暮つたい奴、頭の悪い奴は大嫌いだったし、女性に対しては不美人は全然相手にせず、それに勝気、おしゃべり、出しゃばりの女性は蛇蝎のごとく嫌っていた。

このような玄の性格は、詩章の表題や後年の俳句作品にも影響を与え、叙上の極端に字句に凝り、ユニークさに執する姿勢となつて現われて来たものと思える。

この孤高を貴び、高潔を希い、学識を力と断する玄の生き方は当然詩作品そのものに明瞭に現出しており、読書好き、好学の血の濃さが察知されようというものである。

一方、一流品好みは、食べ物、酒、衣服等についてとくに激しく、タバコはパイプ、シガレットはハ

ーフ・エンド・ハーフ以外用いなかったし、洋品小物類もその昔から一流ブランド物を愛好していた。従つて、無粋野暮な人間を極端に嫌い、意識的に孤高性を堅持し通した傾向が顕著に見られる日常生活を好んで送つた人でもあつた。

このような体質を有した作家の作品は当然格調の高さを尊び、離俗高悟の世界を目指して飛翔することになるのは自然の摂理に通つた行動であつたと考えられる。

——石川萩の死——

花冷の心にきざむ見ぬなきがら

玄

昭和二十二年に、愛弟子石川萩が函館近郊の大沼公園蕪菜沼で入水自殺した折りの追悼句である。

この時、何故か玄は、萩の通夜にも葬儀にも一切列席せず、只管、沈黙を守つていた。

萩の自殺の原因については、さまざま憶測がなされた。懐妊自責説、失恋説、変心説、仲間いじ



め説、玄の嫉妬説等々を当時耳にしたが、いずれが真因かはいまだに判らないままになっている。当時の萩は、離婚をして実家に戻つており、その心の創を癒すかのようには俳句に執心没頭していた。

玄との恋愛関係については、まだ旧制高校生であつた私には、その真否についてはほとんど判らなかつたし、とくに関心を払う問題でもなかつた。ただ、句会の場で正装した二人がいつも並んで端座しているのを、美しい絵巻物を見るように眺めていた記憶以外には何も残つていない。

ただ、気になるのは、玄自身が自筆年譜の中で、昭和十四年(一九三九)二十五歳で結婚するに際し、次のような記述を敢て行つて

「留守節子と結婚させられる。祖父、残生僅かで、一日も早く身固め、孫の顔を見て死にたいという願望に服し、すすめられるまま結婚。但し、将来、真の愛情を与えるべき相手が出現した場合、責任は持ちかねることを条件とした。アホらしい話である。しかし、後年、そういう相手は出現しなかつた」と。

常識人から見れば、何も結婚に際して口にしなくともよいことを何故文字にまでして残したか。もしかしたら、この頃から意中の人として石川萩の存在があつたということなのか。

そうだとすれば、この結婚は不誠実そのものと言われても仕方あるまい。

また、一文の結びとして、しかし、後年、そういう相手は出現しなかつ

たと記していながら、昭和四十三年に妻節子小樽で瘧死で失つて一年そこそこで浅野明美と再婚した事実はどう解釈すればいいのか。

このような行動を眼にして思うことは、玄の人間性の中には、反常識、反倫理、反社会という平穩凡日を根っから否定する反逆孤高の精神が強情なまでに貼りついていたような気がしてならない。

ただし、この反骨傲慢が薄情さだけに通ずるものであつたのなら、門人も離反する者が多く出た筈だが、意外なことに玄の言動には不思議とやさしき、いつくしみ、あたたかみという人温が裏打ちされていたのである。

だからこそ、石川萩自死の後、速かに「死の如し」百句(昭22)を霊誌上に発表、俳人として深甚の弔意を俳句をもって表したのであつた。

桐の花散るときやすむ死の仕末 炎天といのちの間にもの置かず 死へむかふ力の末は夢を踏む 等の名吟を含んだ諸作が並んだことが内外の注目を集めもした。

確かにプロ俳人としては、このような服喪姿勢があつても許されると思つた。

しかし、それにしても一度も仏前へ膝を進めなかつたという心情には、ひよつとすると溺愛するが故の憎念、嫉妬が微妙に絡んでいたのではなからうか。

例えば、玄在住地の近辺で、當時としては十分にセンセーショナルな入水自殺を図つたことは、考え方によっては当てつけがましい行為と解されなくもない。

また、玄の側からの嫉妬による呵責があったとすれば、その頃、玄居に居候していた異母兄弟の白鳥一樹と萩との親交ぶりが玄の逆鱗に触れたとも見られるが、関係者全員が存在していない現在ではその真相を尋ねる術がない。

問題は、この地方都市函館での一事件が、一挙に中央俳壇に飛び火した点である。

故石塚友二(「鶴」前主宰)の随筆「日遣番匠(三三五)」に拠れば、この件に関し、「鶴」誌の編集を担当していた志摩芳次郎が友二を訪ねてきて、突然「斎藤玄のことでお邪魔に上がったんですが、あれは同人を除名しなければなりません」と言ったという。

訳を尋ねると、石川萩の実兄から自殺に至った経緯を記した手紙が送られてきて、斯様な不屈な人物は早々に同人より排斥して社会的に葬ってしまうという強い抗議を申し出ているとのこと。主宰石田波郷が出征中であり、その上、一方口だけでは処断の決心はつかないということで引取って貰ったと書き記されている。

もち論、玄からの同人辞退の申し出もなかったという。玄が事実上、「鶴」同人を辞したのは昭和二十八年三十九歳のときであった。

この間、「壺」は昭和二十年に復刊第一号を出し、同人に波郷、遷子、友二、桂郎等「鶴」の主力メンバーを擁して華々しくスタートを切ったが、その後、一年余りして今度は無断で石塚友二が「壺」同人欄から除名されてしまったと

いうのである。

しかも、その原因は、当時、玄居を訪れた石川桂郎のオーバーな「鶴」の内情話の結果だということ。どうも、どれをとって見ても俗世間的な愚行ばかりで、純粹に文学を愛する人間の行動と思えぬことが多い。

結局、玄はこうした俳人たちの言動に嫌気がさして遂に昭和二十八年に「壺」刊行を断ってしまうのであるが、こうした一連の俳人たちの動きの原因に玄自身の性向言動が大いに関係していたことを果たして知っていたのであろうか。

— 死の如し —

もう一步ことの深奥に踏みこんで俗世間での出来ごとがどのように俳人の作風、人格に影響を及ぼすものかについて考えてみた。

最初に思いつく言葉がある。「何より迷惑で不快やりきれない事は、善人たるの善を有形無形の間に強要強制する点である。…僕はこのような臭みの滲み出た俳句が大嫌ひなのである。」(俳句廻廊「壺」S24・8、9月号)

形式的にして空疎な、口先だけの善意を徹底的に嫌った玄は、さらに重ねて言う。

「僕は魔性の無い人間といふものに興味も湧かぬし、期待を持つことが出来ない。善人だけの善人といふものは、僕にとつて頗る迷惑で不快なものである」と。

この心情の文学的結論は「魔性とは芸術中の美貌であると思ふ」という名言に昇華する。つまり、玄という人間は、生涯、似而非に

ユーマニズムの甘さを徹底的に拒否し通したのである。

さらに、詩集『ムムム』の備忘の痛み の章では、文学精神のあり方について、次のように発言している。

「人間の真実に発する文学精神とは、弱虫で、泣き虫で、かんしゃく持ちなものであるのか。もっと言えば、乱暴で、それ以上に暴力的で粗野で、残酷で、空想的で、病的で、あまり毅然としたところなく、あまり勇氣のあるものではない。」

この狂気、横暴、野生のインパクトを文学精神の拠り所と主張する孤高かつ他の激しい気性と共に、反面、弱虫、泣き虫が同居する詩人としての混沌の底に生きることに志を向けていた玄が、萩の死に対して凡人の幾層倍も傷つき、心痛めたことは想像に難くない。



句集「雁道」は「狩眼」に次ぐ第五句集、昭和50年より53年冬までの作381句を収録し、54年3月に発行された。この句集により北海道で初の第14回蛇笏賞を受賞

『雁道』(かりみち)という集名は、雁の通る道という意で命名した。雁道は、雁が通る時にはそれと知らされる。また雁が通らなくともそこに存在する。時には見え、時には消え、在って無きがごとく、無くて在るがごとくである。これは今後の私の命のありようと、俳境のありようを示唆しているような気がする。

句は、今でも私にとって最も敬愛親昵すべき古典の風格を備えた秀吟が、石田波郷の教示を見事に実践し乍ら「壺」誌上を飾っていた。眞裸に笠懸く飢えてはならぬなり S21
雲の黒白萩にあそぶ秋の銭 S21
松虫の死頃を淡き子の面 S21
私が入門当時、日々、愛護し、心に刻みつけた純粹俳句そのものの作風が、この事件直後の追悼句以降、大きく生死をテーマに据えた観念観想の詩化へと転進して行くのである。

愛弟子の逝去は、確かに筆舌に尽くし難い精神的衝撃であつたらう。その深傷を癒すかのように、玄はその直後に発表した「死の如し」の前掲の三句の他

月下また死す恰好になりけり
今日死なむ明日死なむ
蒲倒れつぐ

等々、一連の諸作は、今は幻の縁しとなつた萩との哀惜の情を慟哭を混えて詠み上げているかに一見みて取れるが、なぜか私にはなんとなく一句一句に空々しさというか、観念に遊ぶ余裕というか、もうひとつ眞摯な情熱が伝わってこない。

このような悲痛のど底底での句作は、心象にしろ具象にしろ、一気に噴き出るように創られる筈なのに、この「死の如し」百句には、萩の自死を引き金として、意識的に自作の作風転化の契機としたような思いがしてならない。

もち論、創作に生涯を賭ける者にとつて、人生のさまざまな諸相、局面が創作衝動に結びつき、それらを工巧くして作風の革新を図ることは責められるべき事ではない。

まして、玄のように風狂を超えた狂気や憎悪の極限としての乱暴を身ほとりに飼っている人間にとつては、われわれ凡人の臆測では判別できない格別の情動があったのである。

しかし、それにしてもこの空々しさは何である。

両者の最終局面に至るまでに、もしかすると秋自身の行為に玄の怒りを買う何かがあったのではないか。

こう思うと、当時、玄と同居していた異母兄弟、白鳥一樹の名前がふつと浮かんでくる。

確証は何もないが、学生の私の眼から見ても、玄、萩、一樹三者間に微妙な心の相剋があったように思われる。この点の究明もないまま、萩の実兄が一方的に玄指揮の手紙を中央に出状したことにより、ますます玄の反俗反骨の血が濃くなったのではない。

酒つごもつ

先師斎藤玄には、旧制高校、大学時代を通じて随分お酒を飲ませて貰った。

その当時、学校の休暇期間は殆ど玄居に日参して、俳誌「壺」の編集を手伝っていたので、私生活の面でも自然と玄と接触する機会が多くなった。

なにしろ、私と十四才違いの玄は、齢三十四、五才という文字通りの壮年期にあつたので、酒も滅法強かった。

飲むものは、ジン、ウイスキーのストレートをチェイサーを着けというスタイルが最も多かった

が、ビール、日本酒、焼酎何でもござれだった。

酒量も当時はまずウイスキーのボトル一本をひとり空にしてから、私をお伴に外へ出かけ、松風町の屋台酒から湯の川温泉の高級割烹での振舞酒に至るまで実によく飲んだものである。

ただし、大学生であつた私には「賢沢は敵」などと勝手なことを言つて、焼酎中心に飲むことを薦めていた。

このような酒中交歓の中で、玄から酒品、酒格、酒飲みの方方を、キリストのガリラヤ山頂の垂訓ではないが、玄の極上の人生訓としていろいろ教えて貰った。

その一、男の酒品は酒肴への対応で決まる。酒を飲みながらガツガツ肴を喰うな。

事実、玄は例えば酒一合を飲み干す間に口にするのは烏賊の塩辛をひと切れ、ふた切れ程しか口にしなかつた。

その二、男の酒は寡黙第一。酔いにまかせて饒舌になるのは凡夫の酒。

とは言つたものの、生来おしゃべり好きで、当時「破れスピーカー」と運名されていた小生にとつてはこの教えはなかなか守れず、いつも玄から「少しは黙つて酒を飲め」と叱られていた。

その三、酒席での余興いわゆる歌や踊りの類いは、興に乗つたら自然にやるべきもので他人に薦められてやるものに非ず。

なる程、粹人酒聖はあく迄モイペースで歌いたくなら歌い、踊りたくなら周囲の人を気にせず

にひとり楽しめということ。

しかし、他人の耳目を大いに気にする私にはこういう心境になかなかならず、すぐに他人の拍手を求め、玄の響きを買っていた。

その四、酒中酔残こそ句作の絶好機。處に居て実を行う。はこの時と心得よ。

そういえば、玄は焼鳥屋、屋台、料亭、遊廓、場所を問わず、よく興に乗ると短冊や色紙に即興句を染筆していた。

玄の強飲強酒は、もしかしたら、句作の起爆剤としてのものであつたかも知れない。

例えば次の一句。

西日に酌めば市井無頼と言はれけり

この句は昭和二十五年晩夏之作である。函館駅前通りに直角にクロアスとして、グリーンベルト通りがあり、そこに連絡船、列車待ちの客相手の屋台がズラリと並んでいた。

玄は、自らの富裕さに対する鬱屈した心理からかこういふ庶民的な場所を愛好し、私もよくお伴をして同席する機会が多かつた。

北の町の大西日にまみれ乍ら、コ



昭和33年 大門広小路屋台

ツブの焼酎をすすする自画像を、自ら市井無頼と称するところに玄の孤高自尊とは異質のシャイな性向をかいま見ることが出来る。

また、その後、銀行に就職してから札幌に出張した時、確か昭和三十一年、二年頃だつたと思うが、盛り場ススキノの焼鳥屋に立寄つた時に、その店の煤けた壁に玄の色紙が飾られていて驚いたことがある。

その句は、

荒布にて昔尊の酌みし酒

であつた。前句も当句も、酔中即興句としては上等のものである。

まず、句に質量感と深甚な俳意が備わっている。こつこつ句境は、玄のように深沈として盃を含む姿勢があつてこそ生まれるものであり、私のように少し飲めばすぐにハーレタ ソファー などと馬鹿声を上げる手合にはなかなか到達できない俳境である。

このように、こよなく酒を愛した玄が嘘のようにほんの少量しか酒を口にしなくなったのは、昭和四十四、五年頃からだつたと思う。

梅雨甘露吾のみ酒は衰えし S 44
酒飲まぬ吾が梅雨寒のわっぱ飯
二句共に飲酒より遠去かつた玄が見えてくる。今から思えば、この頃から既に病魔は玄の身体に忍び込んでいたということなのか。

あれ程酒を愛し、酔を楽しんだ玄が酒を飲まないでいる姿は、痛々しいというより見ているこちらの方が身を削がれる思いであつた。

稿を結ぶに当たつて『玄全句集』より酒に関する句を拾つてみた。

辛口の集ひけるかな冬紅葉 S 18
行春の慈悲茅屋や酔ひ戻る S 21

雪に呼ぶ焼酎那蘇の鐘永し S 25

発表句としては七句位しかない。直接、酒を詠んだ句は確かに少ないが、玄の諸句の底流には、常に酒中酔余の機にしか見えない物の見えたる光が燦然と光芒を放つていたことを思い知る今日この頃である。よく日頃、玄が口にしていた酔中の実、酔余の虚という言葉ほど蕉風の軽みを端的に語つたことばはあるまい。

一人の縁

人は一生の間に、幾人の人との出会いがあるのだろう。

あつたとしても、実につまらぬ些事縁を切つたり、疎遠になつていく相手も数限りなくいる。

反面、文字通り知音の心友として生涯付き合つて一縁を終える仲間も確かに存在する。

こつした人縁という大きな流れの中にあつて、一師斎藤玄は私にとつては、肉親以上に親愛敬慕できる数少ない人のひとりであつた。

徹底的に怒鳴られ、呵責を受けたがそのひとつひとつが実に熟考すればする程、心魂に快く筋する言辞であつた。

私もいずれば確実に冥府へ旅立つ日がやってくる。

もし、その日が訪れたら、私はまず、まづ先に玄に会いたい。

玄の膝前に座して、以前の師弟の絆をいま一度しつかりと結び合いたい。

良くも悪くも、私の一生に多大の影響を与えてくれた玄と相共に一句を詠み合いたいと念願している今日この頃である。



随想

我が故郷

—函館・街・人・思い出—

函中時代の思い出

19期（大正6年卒）
故 渡辺紳一郎

函中時代の私は、先生方から見てあまり善良な生徒ではなかった。五年間の成績は、たいてい前からよりも後から数えた方が早かった。一番成績の悪い時は尻から六番、これは二年から三年になる時だったようだ。一度も落第しなかったのが、まあ見付け物である。後年、天下に名を成すような男は少年時代からすぐれていると言った昔の旧式な先生の考えを、ひっ



くり返すことのできたのは愉快である。凡庸な怠け者、成績極めて不良の少年、数多くある田舎中学の屑みたいな少年だと思われたようである。しかしマスコミの現代では、ラジオやテレビにしょっちゅう出ていけば、名を天下に知らしめ、顔を全国にさらすことはなんでもないこと。

私が函中にはいったのは明治四十五年四月だが、七月に明治天皇崩御で大正元年となった。現在の若い後輩に教えを垂れるような話は少しもない。ただ、ゲツバ（どんじりのこと）の少年も長生きして、チャンスさえあればそしてそのチャンスを逃がさない用意さえあれば、まあまあ相当なところまで行くものであるという実例を私が見ることができれば、なにかの足しにはなるだろう。

明治から大正にかけての函館は、エキゾシズムの風気に充ちていた。坂の上には各国の旗を揚げ、町にはロシア文字の看板を書いた床屋やレストランがあり、北洋漁業の根拠地としてロシアの漁船やノルウエーの捕鯨船が入港、雑貨屋にはロシア語のできる番頭がいた。夏になると香港から英国艦隊が、仏印からフランス船隊が避暑にやって来た。町中西洋人が右往左往していたし、千代ヶ岱にはポーランド人のパン屋があり、新川橋のそばにはロシア人の一家が農場をやっていた。中学校は牧場のまん中にぽつんと建っていた。海岸までずっと無人の野原だった。津軽海峡には、ウラジオとサンフランシスコまたはバンクーバーを

繋ぐ外国船が、しょっちゅう走っていた。

苦虫（略してニガ）という幾何の先生の面白くない時間をエスケープして、晴れた日の砂山に座って世界を旅する昼間の夢を見た。砂山の中に寝ころぶと曇った日には煙草を吹かしても見つからなかった。ドイツのロマン派詩人アイヘンドルフの「ダウゲニヒツ」にあるような、空想の習芸を遠くまで拡げるのを楽しんだ。少年の夢など分かってくれる先生は少なかった。一年の時の三年生に武富安雄という上級生がいて、函中生の多くに文学的趣味を流行させた。中学時代すでに歌人として中央文壇に名を与謝野晶子に知られ成していた。彼は後年アメリカに放浪、日本みたいな狭い国で名を成すことを軽蔑した。

私の同級生、故長谷川海太郎（筆名林不忘）が渡米、武富先輩のいたジョンズ・ホプキンス大学へ頼って行った。函中の後輩が水谷準、故久生十蘭、こうしたエキゾシズムの系列があるのは武富先輩から始まっている。私も青年時代の十数年をヨーロッパで暮すようになった。この系列の一つの環であるかもしれない。

私が函中五年間を通して全甲は、地理と歴史だけ。（このほかは漢文も全甲だがこれは先祖代々の漢学者の家に生れ、特別早教育を受けたからこれは番外）。午後に外国地理のある日は、朝から楽しくほかの授業は耳には入らなかった。地理の故太田盛造先生は、まるで「話の泉」みたいな先生で、な

んでも知っていた。太田先生は私と気が合ったので、あるいは後年、私何か名を成すやつだろうと考えていたようだ。いろんな海外旅行記の話を私だけにしてくれたり本を貸してくれた。NHK「話の泉」の私の中に太田先生が生きているような気がする。現にある函中卒業生が「太田先生そっくりのことを言っていたねえ」という手紙をよこした。スウエンヘディングの中央アジア探検の話も太田先生に聞いたが、後年ストックホルムで、ヘディン自身と一緒に食事をした時に太田先生を偲び「先生が生きていたら手紙を出すのになあ」と思った。

歴史の横岡慶五郎先生も全甲をくれた。なつかしい先生だ。後年バビロンの遺跡に立って講談より面白い横岡先生の授業を思い出した。この話を、後に土井晩翠に話したら、「君バビロンを訪れたかね」と羨ましがった。「ネルソンが死ぬ時こういった」と横岡先生は黒板に英語で「HAVE DONE MY DUTY」と書いて、「アイハブ ドーン……」と読んだ。生徒一同その発音を笑ったが、先生少しも騒がず「ネルソンは鉄砲でやられたからドーンだ」

博物の先生（名前は不明）は、どうしたものか私を憎み嫌い五年間全丙であった。いろんな本を乱読して、先生の教えないことばかり答案に書くのが癪にさわつたらしい。双方、虫が好かないというものらしかった。顕微鏡をのぞくにも成績による出席簿の順で見せる、なかなか私の番に廻ってこな

い。先生は早く教員室へ帰りたい、鐘がなると後の五、六人には見せてくれない。どうせ卒業してもろくなもんにはならないだろうから親切に指導の必要は認めないというわけらしい。模範生必ずしも優秀な卒業生でなく、不良生必ずしも、出来の悪い卒業生と決まらなければいけない。この博物の先生が後にある所の校長になつていったが何かの事件で、免職か、助けようか」となった時、函中の卒業生がその知事の次の役人だった。彼は即時に「くび」といった。これは東京で、警視總監をしていた薄田美朝さん（10期）の直話である。私の弟で（四高在学中死亡）三年下のが居た。昔の高等学校へ行くくらいだから相当科学的頭脳を持っていった。いくらまじめに書いても、博物は乙が丙だったという。「悪い冗費をもつて損したよ」といつていた。そのまた次の弟は六年下で然も、苗字が違っていたが、私の弟と聞いていきなり丙をよこした。生理衛生の点が丙である。この弟というのが、医学博士、生理学者として、ちつとはその名を全国的に知られている杉靖三郎である。

旧制中学までは博物（生物科のよ）な」という授業があったようだ。昭和34年・白楊時報第45号より

朝日新聞フランス等駐在員
論説委員

後年NHK「話の泉」私の秘密」などの解答者としてマスコミに名を成す。「丹下左膳」の著者林不忘（長谷川海太郎）や三和銀行名誉会長で平成17年4月3日106歳で逝去された渡辺忠雄氏も同級生。

一別七十春

42期 (昭和15年卒)
安富 隼平

先日、65年ぶりに杉山裕さん(43期)からお便りを頂きました。共に上磯からの汽車通学生で、お別れしたのは私が函中卒業の春17歳、杉山さんは一年下の容姿端麗な少年でした。

現在旭川にお住まいで、永年弁護士をやっておられます。余技にお書きになっておられ、雑誌に連載後、単行本として刊行された長篇小説「ダブルアクション」「フキオ」等ご惠贈頂きました。余技とはいえ本職はだしの筆力で、北海道を舞台に、複雑な事件と適切な言葉づかいの織りなす見事な綾に敬服しました。

まだお会いしていませんが、会えばどうなるか。

一別相違う十七春 類顔哀髪互いに相詢つ

(17年目にお会いしました。なんとやつれた顔に薄くなった髪、本当に貴方なのですか) 欧陽脩の七言律詩「張生を送る」の冒頭部分です。「一別以来」という挨拶語を思い出し、その出典を右のとおり探し出しました。最初十七春を十七歳の春と読み誤り、そっくりそのままと感激したのですが、後で十七年のことと判りいささかがつかりです。

私の場合一別六十五、切り上げて七十、よってやむなく、一別相違う七十春」と改ざんして、今年82歳の春を楽しむことに致しました。

立待岬・掃苔

45期 (昭和18年卒)
田沼 修二

函館に帰るたび立待岬を訪ねるのが楽しみの一つになっている。津軽海峡を挟んで下北半島を望み渡島半島の恵山から駒ヶ岳まで変化に富む景色を楽しみ、眼下の海岸からは子供の頃の磯遊びの仲間の顔が浮かんでくる。

谷地頭の電停から岬までの緩い坂道の両側に様々な墓が並んでいて、石川啄木の台形の大きな墓には観光客が絶えない。しかし啄木の墓の五メートル程下にある、小池毅の墓や、啄木の墓からやや海岸寄りにある、神彰の墓を訪ねる人を見掛けることは少ない。

小池毅は、会津藩医小池求眞の三男として明治七年、歌業で生まれた。会津藩城により求眞は下北の斗南藩に移され、さらに北海道の寿都に近い歌業で開業医になり、毅はここで生まれた。明治十八年父の死により母に伴われ函館に移り弥生小学校に転校。小学校に通う傍ら、函館病院に勤める長兄などを介し、後に医師から函館市長となる齋藤与一郎少年と交友を深め、共に医学を志す。

毅は小学校卒業後、昼は薬局に勤め夜は英語、独語の習得に励んだ。明治二十三年、十六歳の毅は東京の「済生学舎」に入学、二十六年、十九歳で医師開業試験と陸軍軍医試験に共に合格、陸軍三等軍医に任用される。



北里柴三郎はドイツでコッホに細菌学を学び、破傷風菌の研究で世界的業績を挙げ、明治二十五年に帰朝、伝染病研究所を開いた。かねてから細菌学に強い関心を持つていた小池は、北里に招かれ軍医の身分のまま研究所で伝染病菌の研究に打ち込む。

十四世紀以降ヨーロッパで猖獗をきわめたペストは、十八世紀の始めに沈静化した。次第にアジアに侵入、明治二十七年ついに中国から香港に到達した。

この年に日清戦争が勃発、二十八年四月に講和を結び、台湾領有のため近衛師団を派兵する。当時ペストは香港から台湾に侵入しつつあり、小池は台湾に派遣されペストの防疫と、ペスト菌の発見に尽力し、同年十月に帰国してペストに関する研究に専念する。

しかし台湾のペストは全島に広がり、小池は二十九年一月再び台湾に派遣され二等軍医に昇進、防疫と菌発見に全力を傾注し、世界に先駆けてコレラ菌の性格を明らかにした。しかし不幸にも小池自身もコレラに罹患し、三十一年二

月台湾の地で殉職する。二十四歳であった。

この年十一月、事実上コレラ菌の発見者とも言える小池の業績を高く評価する人々により、彼が育った函館立待岬に小池毅を讃える碑が建てられたのである。現在の小池毅の墓はその碑のあった場所であり、碑文も残されている。

参考資料「会津医魂」小池明著

神彰の名は前述の小池毅に較べれば有名ではあったが、次第に忘れられようとしている。大正十一年に函館末広町の海産物商の家に生まれた神は、宝小学校から中島小学校に転校、函館商業学校に進む。商業時代は絵とロシア語が得意で、卒業後は満州交通公社ハルビン支社に勤めた。

敗戦により神は満州から引き揚げ、東京で失意の日を送りながら函商や満州時代の友人との語らいの中から、ある閃きを得て「ドーン・コザック合唱団」の招聘を思い立ち苦勞の末これを実現させた。

昭和三十一年といつ戦後の荒廃から立ち直りつつあった時代に、この企画は多くの国民の共感を呼んだ。引き続き「ポリシヨイ・パレエ」「ポリシヨイ・サーカス」など旧ソ連からの招聘が悉く成功「赤い呼び屋」ともいわれ、興業界に確固とした基盤を確立した。

神を更に有名にしたのは昭和十七年に公にされた、女流作家・有吉佐和子との結婚であった。神の名前は今では国際的プロモーターや後述の居酒屋チェーン店「北の家族」のオーナーとしてよりも

かつて有吉佐和子の夫であったことと有名である。しかし二人の結婚生活は二年余で破局を迎え、それと連動するように神の事業も行詰まり、倒産に追い込まれる。

離婚と倒産の二重苦の中から神は全く別の道を歩み始めた。昭和四十八年、折から函館を舞台にしたNHKの朝の連続ドラマ「北の家族」の名前を使った居酒屋チェーン店の発足である。安い料金で新鮮な北海道の味を楽しめるとあって新宿裏の店は大繁盛。

その頃、神は病を得、十二年にわたる闘病の末、鎌倉の地で平成十年に逝去した。七十五年の生涯であった。死の直前「北の家族」の株も整理したが、店は平成十四年に他のチェーン店に押されて倒産してしまつた。

啄木の墓から四、五メートル下に神家歴代の大きな墓地があり、その一隅に函館が生んだ希代の風雲児「神彰」が眠っている。

参考資料「虚業成れり」大島幹雄著

石川啄木の有名なあの墓は大正十五年に建てられた。それまでは遺骨は函館図書館の書庫の奥に置かれ、立待岬には今の啄木の墓の手前の共同墓地に木の墓標があるだけであった。大正六年夏、啄木の後援者であり節子夫人の妹と結婚している宮崎郁雨と、函館図書館主事の岡田健蔵に案内されて立待岬を訪れた土岐哀果(善庵)は歌を残している。

「一本の杭にしろせる 友が名の
それも消ゆるか潮風の中に」
不遇の中で夭折した友人啄木への

鎮魂の歌であった。

啄木は郁雨にあてた手紙の中で「死ぬときは函館に行つて死ぬ」と書き残していた。また啄木の死後函館に戻り、夫と同じ結核を患い余命幾許もない節子夫人は、病床を見舞つた郁雨と岡田に、東京に残してきた啄木と義母と長男の遺骨を函館に持ち帰り、やがては自分も一緒に墓に納まりたいと頼んだ。

死の床からの夫人の懇願に岡田は図書館視察に上京の際、前年啄木の葬儀を行った浅草本願寺境内の等光寺を訪ね、遺骨の引渡しを要請したが住職に冷たく拒否される。そこで啄木の文学仲間であり節子夫人に同情を寄せる土岐善麿を読売新聞社に訪ね相談する。たまたま等光寺の住職は善麿の兄にあたり、善麿の仲介で遺骨は岡田が預り函館に運ばれた。

夫の遺骨を受け取った夫人は、やがて二カ月足らずで病に倒れ、遺骨はすべて岡田が図書館の書庫に保管した。

啄木が亡くなって十四年、大正十五年に郁雨が建設費用の大半を拠出し、岡田の献身的な努力で今に残



る墓が完成した。あの特異な形の墓の原型は、日露戦争で樺太の北緯五十度線上に国境が定められ、それを明示するために置かれた日露境界標の形を模したものであった。

最晩年の啄木が、大逆事件を機に次第に左翼思想に傾倒し「時代閉塞の現状」と表現した最後の評論にも、それは窺える。国境の向こう側の思想に寄せた啄木の思いを象徴するものとして、あの独特な形の墓が創られたのである。

参考資料 啄木の骨「小野寺脩郎著「掃苔 墓石の苔を掃くことから、墓参りの意」

猿払村を訪ねて

54期(昭和27年卒)
杉田 博子

或る時湯ノ川温泉で旅館を経営しているクラスメートより倉本聰さんが発起人の「カムバックオーレスト北海道」というイベントに参加してほしいという連絡をいただいた。北海道に植樹するという主旨で会場には芸能人も多数出席していた。私はハルニレの植樹に決めた。

半年位たつて北海道の北端猿払村の村長さんより私の名札を立てハルニレの苗木を植樹した写真と同封した礼状が届いた。猿払村の歴史やお祭りの様子が写真入りでぜひ遊びにいらしてくださいとのことだった。私の初孫は昭和63年10月17日に生まれた。その日は私達の結婚記念日で二重の喜びとなった。そして奇しくも植樹証明書には昭和63年10月17日植樹と書いて

同封してあった。三重の喜びに毎年10月17日には孫の成長と共にハルニレの木がどれだけ大きくなったか遠い北の国に思いを馳せていた。

猿払の植樹以来三年程たった夏、友人八名と利尻礼文島のツアーを企画した。函館で同期会があったのでそれに合わせて猿払村へ行ってみようと思いついた。同期会の翌日バスで猿払へ行く。始めて見る御殿の様な村役場に驚き村長さんにも会った。役場の若い青年が車で案内してくれた。猿払村は村の面積が日本一、ホタテ貝の水揚げ量も日本一で村営牧場には牛が無数にいた。売られて行く日付の札が耳につけられ待機していた。

売られゆく牛の目やさし夏の雲
昭和14年猿払沖で旧ソ連船が吹雪の中で座礁し村民が救助にあたり四〇〇名を救出したが七〇〇名以上の命が失われる世界の海難史に残る大惨事があった。日露友好のシンボルというインディモルカ号慰霊碑が海に向かって建っていた。夏の陽は高く、一日二本しかないバスにあと二時間もあまる。案内してくれた青年に丁寧に



インディモルカ号慰霊碑

言つて別れ喫茶店のコーヒードで喉をうるおし外のベンチでのんびりする。雄大なオホーツクの海と広大な大地が空と一つになったような錯覚を覚えた。どこからかはや法師蟬の音が聞えたよつだ。猿払村に別れを告げ明日は稚内空港で落ち合う友人達と礼文に向う。

特集「青函連絡船・洞爺丸」を読んで

58期(昭和31年卒)
山本 善治

特集記事を読んで、50年前の記憶が断片的に蘇りました。私が2年生の時でした。実はあの猛烈な台風の前、私は函中の校舎にいたのです。

その日、私の担任(2年2組)であった有江良久先生が宿直でした。そのことを知った私は悪の仲間を集め、先生をたきつけて、宿直室での麻雀をセツとしたのです。誰が一緒であったかは記憶にありません。



有江先生の名譽のために言いますが、先生からの誘いではなく、私から仕掛けたのです(と記憶しております)。その頃、的場中学校の恩師の島田先生に手ほどきを受けて麻雀を覚えたのは私、とにかく卓を囲みたかったのです。当然勉強はおろそかになる一方でした。麻雀を始めるとぐくぐく経った頃でしょうか、宿直室の電話が何



昭和29年、台風15号で倒れたポプラ

度か鳴るのです。「校庭のポプラが倒れそうだ」という忠告とも苦情ともとれる内容のようでした。先生が様子を見に行かれました。戻るなり、「外はかなり危険だからすぐに帰宅した方がよい」とのお達しでした。強い風雨をまともに受けながら、ようやく家に辿り着いたものでした。

翌日、洞爺丸をはじめとする青函連絡船の惨事を知りました。そして登校して唖然としました。函中のシンボルであり心のよりどころでもあるポプラが、何本もなぎ倒されていたのです。これではそばにお住まいの方々は危険を感じたでしょう。直接被害にあつたかどうかは記憶しておりませんが。

ただ、有江先生はたぶん一睡もせずその対応に当たられたものと思います。そのご苦労は大変なことであつたらつと推察致します。もちろん生徒と麻雀をしていたなどとは言えないでしょうから。50年経つたいま、時効ですよ。有江先生をさがめないでください。有江先生は平成17年7月8日逝去されました。

語りつく北方四島

61期(昭和34年卒)
三上 洋一

毎年二月七日は、「北方領土の日」である。毎年この日、「返還要求全国大会」が九段会館大ホールで開かれている。元島民の団体はもちろん、内閣府、連合、学校関係団体、各種都道府県団体まで約七十団体が参加する。二〇〇三年の大会入口「ガン」は、語り継ぐ北方四島であった。返還の見通しが立たないまま半世紀が過ぎ、元島民の生存者は半数を切り、平均年齢が七一歳に達したことから、次世代への記憶の継承を中心テーマに据えざるを得なかったのである。小冊子「北方領土をこ紹介します(継承編)」が編集され、配布された。その中で、元島民として筆者も協力した、最も劇的なソ連軍上陸の部分を紹介する。



「ソ連軍の択捉島上陸」
八月二十八日、択捉島(エトロフトウ)留別村(ルベツムラ)一帯は濃い霧の中にあつた。ソ連軍は午前十時過ぎ、濃霧を利用して駆逐艦と輸送船各一隻を湾内に送り込んだ。気付いた時には、村は五百人の兵隊に囲まれていた。

銃を構えたソ連兵は、村の北側を流れる留別川をはさんで二手に分かれて上陸した。北の一隊は村を一望できる「風見の山」に陣取った。次いで橋を渡って村内に入り、まず郵便局を囲んだ。ホールドアップした7人の局員のうち一人を残して、外に追い出した。三上二郎局長ら二人は村役場にソ連軍の侵攻

を伝え、他の局員は村人に戸締りを促して歩いた。

この日の濃霧は留別湾に限ったもので、それは島内の郵便局との朝の交信で分かっていた。三上局長は「上陸はここだけだろう」と判断した。ならばこの状況を何とかして紗那村(シヤナムラ)の郵便局に知らせねばならない。だが村内で唯一交信手段のある局に戻ることはできない。局長は阿部局員一人を連れ、自宅にあった非常用電話機と馬具を持ち出すと、「風見の山」の近くにある放牧地を目差して、敵の裏手から登り、馬に馬具を取付けた。その時、馬がいなくなった。ソ連兵が気づき、すぐ連発銃を発射した。幸いにも弾は逸れた。二人は思いきり馬に鞭を入れた。

途中、紗那との中間地点で非常用電話を繋ぎ、「留別がソ連軍に包囲された。詳しいことは着いてから話す」と紗那郵便局に電話を

入れ、次いで日本軍本部が駐屯する天寧(テンネイ)の郵便局へも連絡した。午後5時頃のことであつた。紗那郵便局の川口局員は直ちに島内の各村、各所に無線通報した。

択捉島では留別郵便局が唯一の根室への中継局だった。それがソ連軍に押さえられてしまった以上、根室との交信は途絶えたも同然だった。残された方法は、無線で根室落石(オチイシ)無線局と定時連絡している紗那郵便局まで走ることだった。「なんとしても根室に連絡しなければ」、陽は落ち、暗い夜道を紗那へと急いだ。

留別から紗那までは霧も出沒する悪路を28kmも走らねばならず、紗那に着いたのは午後九時半だった。「二八日午前十時、ソ連軍留別に上陸、役場吏員、郵便局員を留別国民学校に収容した」との郵政局長宛ての報告電信を無線士に托し、村の関係者に占領状況を説明した。村人は馬を用意し、二人は留別村へと再び夜道を駆けつけた。

「紗那郵便局」
八月二十八日、紗那郵便局では午前十一時頃に留別局との回線が不通になった。呼び出し続けても応答がなく、不安を募らせている最中に、留別局長から電話が入った。その後、紗那局は、根室の落石無線局を呼び出し続けた。留別局長の到着後、午後十時になって、やっと連絡がついた。択捉島がソ連軍に占領されたことは、こうして本土に伝えられた。

択捉島の後、ソ連軍は九月一日に国後(クナシリ)島と色丹(シ

コタン)島、三日に歯舞(ハボマイ)群島に上陸した。島民は軍の監視下に置かれ、本土との連絡は遮断された。

「占領状況と強制送還」
以下、小冊子の内容は、占領状況とソ連軍の管理、脱島体験・悲話、本土への強制送還、引揚げ時の収容所生活と続く。特筆すべきは、末尾に最近の北方四島とロシア人の生活状況が記されていることである。何れも紙面の都合で割愛する。

なぜ、四島の現状とロシア人の生活が紹介されるのか。それはビザなし渡航がもたらした交流の成果といつてよい。

「ビザなし交流」
一九五六年「日ソ共同宣言」の発効により、両国間に国交が再開された。しかし、今日に至るまで、多くの外交交渉が行われたが、領土問題に関する実質的進展は見られなかった。

一九九一年ゴルバチョフ大統領の訪日をきっかけに、日本側元島民とロシア側現住民との交流の拡大、即ちビザなし渡航の枠組みができあがった。今日までに、日本側六五七一人、ロシア側五三三八人の相互訪問が実現している。この交流を通じて、「ロシア人島民は領土問題があることをはじめに理解した」のである。意見の対立もあるが、回を重ねて気持ちが通じ合うようになった。このような事情を背景に、「日本家屋保存」の話が持ち上がっている。

「北方領土の日本家屋の保存」
現在、択捉島紗那に二棟の建物、「択捉島水産会事務所」と「紗那郵便

局」が残存している。「わずかに残されたこの建物を何とか保存してほしい」と日本側訪問団は強く要望してきた。水産会家屋は、昭和の初めに建てられた洋風日本家屋「トラスト構造(合掌組造り)」で、屋根の梁ダンブ飾りが特徴的、モダンな建築である。これに類した建物は、函館市に数棟残っており、市の保存指定住宅になっている。

ロシア人は、「二つの建物は老朽化が進み、取り壊す予定である」と伝えてきた。壊す前に知らせてきたことは画期的である。十三年にわたり、地道にビザなし交流を重ねてきた成果であり、在住するロシア人の信頼と友情関係が確実に育まれてきたことを感じさせる。

二〇〇五年二月七日、北方領土返還要求全国大会は次のような決議文を採択した。

「建物保存特別決議文」

(前略) 択捉島紗那には、「択捉島水産会事務所」と「紗那郵便局」の2棟の建物が残存しています。この郵便局は、六十年前ソ連軍の上陸を電信で本土に伝えた歴史的建物です。今、この二つの建物は老朽化が進み崩壊しようとしています。日本人が住んでいた貴重な証しでもあるこの建物を残すことは大きな意義があり、保存に向けた国民一人一人の力を結集させましょう。

この保存運動の組織、「北方領土日本家屋保存友好委員会」が本年七月に結成された。北方領土返還運動の一環であるので、できるだけ多くの方々が関心を寄せて下さるようお願いしたい。

第60期 三・三會

北原耕太郎記

平成16年の例会は、9月18日(土)17時より、港区青山は通称骨董通りの東京ガス社員クラブ、青山クラブで開かれた。出席は38名と毎回多数の参加である。

幹事長内藤尚君の開会挨拶で始まり、ご出席の恩師吉田信一先生にもご挨拶していただいた。乾杯の発声は、函館からまた横浜の住人となった小林薫君。スピーチはルールにより、久しぶり出席の田村雅俊君、武田至正君、初参加の宮川(成田)満子さん。また泉憲一君は、実力テスト成績表等懐しい古典的資料を見せてくれたのに驚いた。会計報告は、幹事松田(木下)栄美子さんから、白楊ヶ丘同窓会へ積極的な参加のお願い等が幹事上平慶一君からあった。

函館での全国大会開催のため、東京では2年ぶりの会合となり、テーブルのあちこちに、若返った歓談の輪がいくつもできている。幹事紅谷弘一君の中締めにより、一次会は終了した。お互いに、次の元氣な参加を約して散会。語り足りない飲み足りないメンバー多数。二次会へ。場所は、すぐ近くの「うすげぼ」。65歳はまだまだ血氣盛んであった。

なお吉田先生は、4月に函館へ戻られた(テ04一〇八一 函館市富岡町三三二六八〇三)。

第61期

伊藤政侑記

数年前より恒例となった旅行会の平成16年度は「上高地」散策を実施。各々の交通手段で九月十日現地集合。女性十一名、男性十五名が参加した。

ホテルに荷物を預け、河童橋を基点に梓川沿いに明神池へ。途中、出会う人達と交す「こんにちわ」の挨拶は山系独特の風習でもあった。上高地は標高一、五〇〇メートルの高地に在り、歩く事そのものが循環器系に効くという。少々の雨は、むしろ木々に風情を加え、一時間ほどで針葉樹林に囲まれた聖域・明神池に到着した。『上高地は古くから神降地、神合地、神垣内、神河内とされ神々を



祀るに最も相応しい神聖な浄地」と池畔の穂高神社奥宮由緒には記す。一之池、箱庭を思わせる二之池を眺め、暫し厳肅な気持ちに。ホテルへの帰路、明神館という売店前で小休憩をしたが、自然石を彫り込んだ貯水槽に真つ赤なりんごを浮かべていた。こんなに美味しいものだったとは。

長野県南安曇郡安曇村上高地・村営上高地アルペンホテル。当日の宿は館内至る所に木が使用され、開放感あふれる快適な造り。六時に始まった夕食・懇親会の笑顔、笑顔は毎回の事、秋の長い夜を存分に楽しんだ。

翌朝は晴天、木道や歩行者専用自然研究路をウォーキング。遠く近く梓川のせせらぎを聞き、奔るのを見て田代池、大正池へ。清流は川幅の広い所・狭い所、浅い所・深い所で微妙にその音色・色彩を変えていた。焼岳の噴火で湖が出現、一夜にして森が水没、立ち枯れ木が林立した瑠璃色の大正池。夢中になってシャッターを押した。上高地帝国ホテルでの昼食のカレーライス、この話は、いずれ、ご披露する事もあろう。

第61期 活動短信

金子公彦記

春季旅行会は、五月十三・十四の両日で会津若松・喜多方方面へのバス旅行を行い五色沼、塔のへつり、会津武家屋敷、鶴ヶ城、大和川酒造などを回り東山温泉で宿泊。皆さ

ん酒量は落ちたものの楽しい旅行となった。また、有志による愛知万博ツアーを六月十・十一日に開催。グローバルハウス・オレンジ館冷凍マンモスを見た女性八名が見事幸運の矢を射とめ、読売地球新聞・記念版に大きく写真入りで記事が掲載され、これを手にした女性陣は、万博見学が一番の思い出になると大喜びであった。



「愛・地球博」グローバル・ハウスの読売新聞編集センターを訪れた、函館中部61期様で一行

第63期 午末の会

小林嘉則記

昭和36年、60年安保で揺れる日本に行く未を漠然とながら不安な思惑で卒業して44年。バブル時期から現在のIT時代に振り回されながら、何やら落着きの悪い人生を歩んで来た。大体が定年を迎え女性陣は男より元氣だ。

その女性パワーに後押しされて第21回東京同期会は、東京修学旅行」という企画で5月28・29日に一泊2日の開催となった。

何と言っても北海道から初参加の面々(旧姓・石岡、清藤、布浦、川上、吉田、佐藤、佐々木、柏さんの8名)そして東京にいても初



めての参加になった、石崎、天野さん達が会を盛り上げてくれた。会場は本郷の旅館・鳳明館。幹事が来る予定の3時よりも早くに札幌組が到着。6時の宴会には総勢38名の顔ぶれ揃い、何とも賑やかなこと。卒業以来の顔合わせを考慮して、卒業アルバムの顔写真入り名札をつけてもらったが、その変わり様にまたひとしきり大騒ぎとなった。

全員にスピーチをしてもらい、二次会までぶっ通しの大広間はあちこちに固まってるの歓談がくり拡がり、10時頃からは泊り組と帰宅組のお別れで妻はともかく終了。三次会は議論沸騰、遅くは2時過ぎまで飲んでいたらよつた。翌日も好天に恵まれ、東京駅から出発のはとバス『山の手下町』

に乗る19名も元気に集合。まずは明治神宮の森の中を散歩して昨夜の疲れを癒す。お昼は明治記念館のお弁当に舌鼓。広い芝生の庭では結婚式で賑わう人達に混じって我々も記念写真を撮り浅草に向つて下町らしいたくさんの人出の中、観音様に祈念した後の隅田川下りも満席状態。缶ビール2本も空かないうちに浜離宮に到着。それぞれ庭園散歩やのどを潤して、のんびりとした半日の旅を終えた。

東京駅4時半、昨日からの長い時間を過ごした修学旅行生はお別れを惜しみながらひとまず散会。今夜も泊まりの北海道組を送って残った総勢11名新宿へ。軽くワインで食事の後は、函館組石岡久美子さんの提案で都庁展望台に上がつて東京夜景見物で締めくくる。梅雨入り前の晴れ渡ったお天気の中で二日間の修学旅行も無事終了。10月15日の函中110周年記念の函館大会での再会を約束して、気持ちの良い夜風に吹かれながらそれぞれ帰途に着いた。

第65期・函中三八会

菅原大作 記

今年の函中三八会は、7月2日(土)、3日(日)の両日、東京・文京区本郷の 鳳明館・本館 で開催された。

今年も、一昨年、昨年に引き続き、一泊二日の日程で実施した。会場の鳳明館は、創業以来100年にもなる純和風旅館。昔の修学旅行を思い出させる雰囲気。

今年も、25人(男20人、女5人)が参加。うち、17人が宴会のみに

出席。宿泊組は8人(全員男)。土日の開催で、落ち着いてじっくり、あずましく皆で飲もうという幹事の思惑とは裏腹に、参加者、宿泊者とも予想より少なかつた。遠隔地からの参加は、函館の松原忠之氏と盛岡の蛸崎廣司氏。また、卒業以来の高橋千加志、高橋久雄の両氏の他、久々参加の草間(高橋)幸子さん、杉村文三郎、辻幹男、藤原英樹、吉沢隆雄の各氏など、懐かしい顔触れが揃った。

午後3時と早めに参集してもらったが、宿泊組と早い到着のメンバーは宴会前に一風呂浴びた浴衣がけ姿で寛いだ仲間が出席して、午後6時過ぎ和室の大広間で宴が始まった。

最初に、今年5月9日に肺がんで急逝された品川邦嘉氏を偲び、黙祷。次いで、元応援団長の中里清敏氏の発声で乾杯、宴が始まった。乾杯後に、近況報告を兼ねた



自己紹介をしてもらったが、健康に問題を抱える報告が多く、健康体はむしろ少なかつた。

午後9時過ぎの記念撮影後、一次会を終了して、およそ12畳の和室で二次会に。互いに膝を突き合わせて高校時代の思い出話を話し合ったが、欠席した仲間にも携帯電話で連絡をしたり、また林奥氏が持参した学生時代の帽子を交互にかぶったりして昔を思い出していた。二次会は、午後10時30分過ぎに終了、宿泊組に見送られながら次回(平成18年7月1日・土・開催)の再会を約して別れた。

第67期 志丸会

中川竹見 記

私がこの会に初めて参加したのは、今から5年前、35年ぶりの再会だった。新年会に出席し、知っている顔が見当たらず、最初は面食らった。中年の小父さん、小母さんが仲間内で談笑し、私は場違いなところに出席したと思ったものだ。

しかし不思議なもので、適当に話を合わせているうちに、薄くなった髪がフサフサだし、二重顎や目尻の皺も伸び、高校時代の容姿が自然に蘇ってきていた。

そうなる話は早い。卒業以来ずっと親交があったかのように振舞い出し、「お前、俺」の関係になつてしまつた。

この志丸会は、本部を函館に置き、札幌と東京にそれぞれ支部があり、各地とも毎年の新年会は当然、函館の本部では、お盆の帰郷時期に合わせてゴルフやハイキングそし

て函館山のロープウェイ山頂のレストランで懇親会などしている。東京支部も、さほど風流な者が揃っているとは思えないが、春は花見、秋は菊観賞と理由をつけては一献傾けている。

そして大々的だったのが、二千年に行つたミレニアム全国大会。札幌のホテルに70余名が参加し、同期の芸術家に頼み、旗と揃いのTシャツまで誂えた。四文字熟語よろしく、我々のテーマとして「健・豊・美・楽」を選び、グループに分かれてその意図するところを発表する。

最近では中学生でも「コッパズカシイ」とやらないようなことを、50歳を過ぎた大人が真面目に議論するところが面白い。

さて、今年の東京志丸会は1月22日(土)の新年会で幕を開けた。恒例となっているO君のレストラに、函館のY君、札幌のN君を



加えた総勢21名が集った。毎年遠方から参加してくれるマドンナのSさん、Tさんが欠席となったのは寂しいが、いつものメンバーが懐かしい顔を見せてくれた。今回の話題の中心は、昨年の上海旅行でT君が満州馬賊よろしく、「狭い日本には住み飽きた」と、上海に移住し事業を始めた。

そこで志丸会ではT君を激励しようとして、中国に20名で押しかけたのだ。その時の写真が格好の酒のつまみとなり、雑談と酒を交わし酔っ払った後は、河岸を変えてカラオケ。そして最終電車でご帰還という恒例のパターンで、めでたく今年の新年会は終わった。

来年の干支は戌年。志丸会の四分の三の者が還暦を迎える。ミレニアム大会の時、次回の全国大会は還暦を祝い東京支部が幹事役を勤めるという合意がなされている。全員が還暦となる再来年の実行になるかもしれないが、その日を今から楽しみにしている。「健豊美楽」を基本テーマとして益々意気盛んな志丸会を紹介した。

第68期・よいよい会

木戸正文 記

毎年、6月の第二土曜日を「よいよい会」の例会の日と決めている。今回は河口湖での開催となった。

当日は台風4号の接近で、天気予報は曇り時々雨、確率50%のこと。しかしながら、自称晴れ男の高橋弘昭君の参加もあってか、雨なし、翌日はなんと本年度最高気温を記録する良い天気となった。

現地集合の宿へ、夕方ゴルフ組



第71期・報告
加納元雄 記

と湖畔の美術館、博物館巡りをしてきた女性陣が到着。

早速、ひと風呂浴びて宴会の開始。まずは再会を祝してビールで乾杯。修学旅行的雰囲気の中で近況報告、還暦ツアーの提案などなど。

一夜明け、ゴルフ組の車に分乗して、富士山五合目へ出発。ガストではいたが途中、北アルプスの山々と眼下に湖を望み見る事ができた。次いで、久保田一竹美術館へ、木組み、吹き抜け展示室に驚嘆、お目当ての織締絞、「一竹辻が花」染めの数々の和服と、庭園の美しさを堪能。

富士山と新緑の萌え出る木々の気を腹一杯吸い込み、心身ともにリフレッシュできた二日間であった。

参加は雨宮(工藤)、麻田(村本)、大河原(小澤)、細野、塩田(村井)、村上(佐藤)、吉野(米一)さん、池端、奥野、及能、木戸、白崎、相馬、高橋、淵沢君

第71期は、6月18日ホテルニューオータニ内「ガンシップ」で、大会を行った。当日は一・二次会合わせ34名と例年より若千人数は少なかったが、柴田先生(51期)が今年は前泊でお出でになり、二次会には大学の講義を終えた水江先生(60期)も駆け付けられた。定番となっている近況報告では、くじで引いた質問に答えるゲームを行い、パイアグラの効能について医学部教授が解説する場面もあって、大変有意義(?)で賑やかな会となった。

71期は、大会以外にも年に数回集まりを行っている。

最もたくさん集まる催しは新年会である。今年は1月22日、21人が集まり、まず神田明神に初詣。「天野屋」の甘酒を呑んだ後東京国際フォーラムの「東天紅」へ。幹事の村興治君は、同期会初の試みの福引を用意し、大いに盛り上がった。また、同期生の上京や転出の際の歓送迎会もある。

最近では3月に、郡山に転居する小池勇一君の送別会を、加藤由樹子さん(現島田夕起子)の幹事で開催した。小規模でやる積りだったのが、8月に活動拠点を名古屋に移す予定の片岡進君が「自分もゲストに」と乱入?。十数人が集まって大宴会となった。

昨年11月には、富岡和子さん(現早川)が札幌から上京。同級生の市澤仁美さんが幹事になって、この時も約20人が集まり、大いに盛り上がった。

昨年から一泊で「修学旅行」に行くグループもあり、また極少数で密度の濃い集まりをしている人達もいるようである。71期同期会は、会の名前も会則も無く、「来る者拒まず、去る者追わず」「緩い関係の下で、自由に集まる」「分派活動は大いにやるべし」を不文の会是に、運営している。同期会が憩いの場であるためには、社会の一員としての良識、常識を守るの当然として、それ以上の「決まりごと」は、出来るだけ少なくし、統一は全く不要だが調和は取れている集まりでありたい、と願いつつ、次の機会を心待ちにしているこの頃である。

東京支部会員名簿完成

昨年より会員の皆様にご協力を戴いた東京支部会員名簿が、このたび完成いたしました。今回は、住所、勤務先等に加えて、出身小・中学校、所属クラブ活動、趣味別の一覧を加え、白楊ヶ丘同窓会をベースに様々なOB会、同好会等の交流に役立つよう工夫をこらしております。お手許に一冊お揃え頂き、皆さんの手で世代を超えた交流の輪を広げて行きませんか。

全て役員による手作りのため、実費で頒布いたします。価格は以下のとおりです。ご希望の方は、年会費の払込票に必要事項をご記入の上、年会費に名簿の金額を加えてお振込み下さい。入金確認後発送いたします。

- ・電子メールによる配信：300円
- ・CD：500円
- ・コピー製本：2,500円

この名簿は、通常の名簿と違って印刷・製本をしないため、逆に何時でも内容の更新、改訂が出来ます。新会員の登録、掲載事項の追加、変更等を随時行って参りますので、お気付きの方は事務局宛てご一報下さい。

なおこの名簿は、会員が相互に親睦を深めることを目的に制作いたしました。ご利用に当たっては、「個人情報、情報を得ている人のものではなく、情報になっている本人のもの」という意識を持ち、目的外の使用は絶対にお止め下さい。また情報の漏洩にも十分ご注意ください。

【東京支部会員名簿に関するお問合せ・連絡先】

白楊ヶ丘同窓会東京支部
〒160-0022 東京都新宿区新宿1-13-8 葵ビル302
TEL：03-3351-9966
E-Mail Address：kanchu-tokyo@r6.dion.ne.jp
(担当) 71期(昭和44年卒) 加納元雄
TEL：090-2300-0148
E-Mail Address：mo_kanou@yahoo.co.jp
78期(昭和51年卒) 岡部 あさ子
TEL：044-987-0199
E-Mail Address：a1006@beige.ocn.ne.jp

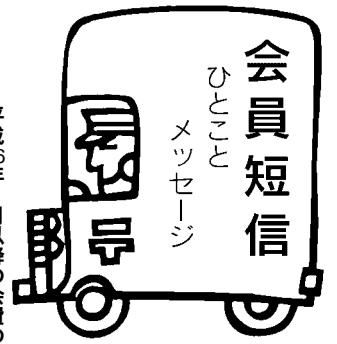
ホームページ・コンテンツの募集

最近、諸先輩から同窓会のホームページをもっと有効利用し同窓会の活性化を図ってはどうかと言うご意見を頂いています。また、今年は函館中部高校創立110周年を記念し、会員同士の情報交換や交流をさらに活発にしていく為に、ホームページをリニューアルする事に致しました。この機会に多くの会員の皆様からご意見やご要望をお聞きし、より利便性が高く有効なホームページ作りを致したく存じます。つきましては、是非皆様の活発なアイデアや、ご意見を頂きたく宜しくお願い致します。また、特に実際にホームページ作り携わっている方がいらっしゃいましたらご連絡頂ければ幸いです。積極的な皆様の参加を期待しています。今後も、定期的に皆様へメールをお出しし、ご意見などをお聞きして参る所存ですので宜しくお願い致します。

【各期同期会開催案通知】の項目に載せる情報
【函中・郷土出身者開催行事】の項目に載せる情報

連絡は(1)～(4)の方法で、チラシなどがありましたら郵送、FAX、E-mailの添付ファイルでお願いします。

- (1) 郵送：〒160-0022 新宿区新宿1-13-8-302 白楊ヶ丘同窓会東京支部事務所
- (2) FAX：03-3341-5048
- (3) E-mail：mikimatsu@r9.dion.ne.jp (松田幹夫)
- (4) HPの掲示板に直接書き込む
ホームページ担当 67期(昭和40年卒) 松田幹夫



平成16年9月以降の会費の
振替用紙のメッセージから

物故者 謹んでご冥福をお祈りいたします。
渡辺 忠雄(19期・大6年卒)
平成17年4月3日没
中小田 榮一(32期・昭5年卒)
平成14年2月20日没
木原 芳男(34期・昭7年卒)
平成15年11月4日没
出町 卓(36期・昭9年卒)
平成16年2月13日没
藤井 昇(36期・昭9年卒)
平成14年3月没
相馬 正樹(40期・昭13年卒)
平成16年12月19日没
清水啓三郎(53期・昭26年卒)
平成16年2月21日没
小泉 文男(56期・昭29年卒)
平成17年1月没
若杉 康孝(56期・昭29年卒)
平成17年没
品川 邦嘉(65期・昭38年卒)
平成17年5月9日没
有江良久教諭
平成17年7月8日没
田熊國太郎(33期・昭6年卒)
「ふるさと」のニュースは何故か心に沁みて懐しく拝読させて頂

いています。年の所為でしょうか、有難いことです。(91歳)
柿本 大豊(38期・昭11年卒)
函館には永い間帰っておりませんので、時々何か雑誌などで市街の写真などで見るごことがあります。大変なつかしい思いがします。満86才になりましたが忘れていません。

龜井 浩(39期・昭12年卒)
白楊だより毎号お送りいただき誠にありがとうございます。同期の諸氏の短信をなつかしく読ませていただき、在学当時を思い出して感無量な心境です。次号を楽しみに待っております。
今井 清(40期・和13年卒)
東京白楊だより第27号ありがとうございました。懐しく拝見しております。

相馬 正樹(40期・和13年卒)
20年ぐらいい前にはわが40期の総会への出席者数トップを誇ったこともあったのだが、年齢80を数える頃ともなると氣息奄々、1もしくは2名となってしまうのは残念。(平成16年12月逝去)
安富 準平(42期・昭15年卒)
19期大正6年卒の渡辺忠雄先輩は105歳。私は大正12年生れ81歳。遙かな山頂を仰ぎ見えています。
井筒 吉彦(43期・和16年卒)
約30年間続けてきた評議員を昨年辞して、何とか責任を果たせてほっとしています。われわれ同期の仲間は80歳を越えています。他の方々に迷惑をかけないようになりたいと思っています。
三上理一郎(44期・和17年卒)
駒大苫小牧高校甲子園制覇に

「道産子」の夢がかなえられた。
小野寺吉彦(51期・昭23・24年卒)
当支部の年間活動状況からみて、よその類似会と比較して思うに、年会費金額が高いのではないかと、年会費納率アップの為見直してほしい。

高村 亮一(51期・昭23・24年卒)
函中を出されて55年?73才永いよつで短い年月をただただ重ねてきたようです。60半ばを過ぎ種々病気をしています。日々内外を問わず人間の陰惨な行為に酷罰、地震、噴火、台風がワッと押し寄せ、罰が与えられているかと思いますが、生命あるうちは頑張りましょう。
鳥居 久靖(54期・昭27年卒)
今年3月から又東京へ帰ってきました。

山口 ヒロ(55期・和28年卒)
秋田に来てからは中々思うようには出席出来なくて残念です。来年こそはと思っております。悪しからず。
加藤 秀一(57期・昭30年卒)
「東京白楊だより」ありがとうございます。同窓会東京支部のますますのご発展をお祈りいたします。
小竹 嘉子(57期・昭30年卒)
よろしく願っています。
佐藤 孝(57期・昭30年卒)
同窓会に毎回欠席して申訳ありません。今回も手違いで名簿提出の時期を逸することになりました。遅くなりましたが会費のみ送りますのでよろしく願います。
寺田志保子(57期・昭30年卒)
いつもご連絡ありがとうございます。

体に注意して楽しく過ごしております。
堀江 郁子(57期・昭30年卒)
秋の風物詩になりつつある白楊だよりありがとうございます。函中魂が息づいているようですね。いいです。「お前達は女生徒がいていいな」と言っていた主人は5月2日にガンで逝ってしまいました。皆様の健康を心から祈ります。

吉田 精吾(57期・昭30年卒)
今年の親睦大会は、丁度翌日に箱根で同期会を開いたため、同期の参加は小生のみだった。来年は卒業50周年、古稀を迎えて函館で同期会を開催する予定であり、今からとても楽しみです。大いに盛り上がるに違いない。
和田 若人(57期・和30年卒)
いつもお世話になりました。

越智 馨(58期・和31年卒)
出席したいと思いつつながら他の用事と重なることもあって残念です。幹事の方々のご苦勞に心より感謝申し上げます。
芦刈 宏之(59期・昭32年卒)
まだ現役です。今後ともよろしくお願いいたします。
伊藤 紀子(60期・昭33年卒)
東京白楊だよりありがとうございます。運管・発行・案内と沢山の方々のお力とご苦勞に思いをいたしております。私はいよいよ老化してきたのでしよう。昨年は年会費の納入も忘れておりました。ごめんなさい。
佐々木住明(61期・昭34年卒)
東京白楊だよりご送付いただき有難うございました。

市丸 大平(62期・昭35年卒)
利根川、江戸川、鬼怒川、小見川、新利根川などのまわりをサイクリングで楽しく走りまわっています。おかげでこの周辺の地理がとても詳しくなりました。ますます元気です。

須山 慶子(62期・昭35年卒)
8月末に函館市民交響楽団とロシアの楽団の人たちとの共演の「悲愴」など、すばらしい音楽をきかせていただきました。指揮者の中島様は同じ中学校だったと思いい、皆様函館をリードする存在になられていて、とても懐しく思いました。
玉川 修(62期・昭35年卒)
「東京白楊だより」の充実と関係者の情熱に感激しました。深く謝意を表します。
石崎 篤子(63期・昭36年卒)
今回は参加出来ません。次回に会えるのを楽しみにしております。私のパソコンのメールアドレスは isizaki-ATUKO@icomm.home.ne.jp

角田 捷雄(63期・昭36年卒)
母校のますますのご発展を祈念します。
徳田 定勝(64期・昭37年卒)
60歳を過ぎてから、実家のお菓子屋を継ぐことになりました。売れ筋は道南名物「昆布最中」「昆布羊羹」です。函館空港売店ポルックスにも置いてあります。お見知り置きください。
高橋 久雄(65期・昭38年卒)
皆様お元気ですか?私も今年の8月26日で還暦を迎えました。今現在週刊誌「プレイボーイ」の編集に携っています。それでは又...

千葉 恵寿(65期・昭38年卒)
同窓会参加致します。楽しみに
してしますので宜しくお願い致し
ます。

石橋 信彦(68期・昭40年卒)
17年4月から市町村合併の為住
所が柏市大津ヶ丘4・30・6に変更
になります。

丸山 隆(68期・昭41年卒)
先週ドイツから戻ったところで
すが、今月あるいは来月はアメリ
カへ出張の予定。そろそろゆとり
生活も良いのではと考えだしまし
た。

斉藤 裕子(69期・昭42年卒)
いつも通信楽しく拝見させて頂
きます。運営の御苦労は計り知れ
ないと思えますし、協力もしたい
のですが、中々出来ず申し訳あり
ません。今後とも同窓会の企画を
念じております。

片岡 進(71期・昭44年卒)
寂しいことに16年度も赤字決算
なんです。赤字は繰り越し金が
借入金か、あるいはどなたかの寄
付で補填したのだと思いますが、
その補填の状況も収支報告書に明
記すべきだと思います。赤字のま
まの決算報告書では何とも気持ち
が落ち着きません。

川村 哲雄(71期・昭44年卒)
平成16年度第71期同期会を6月
19日(土)午後4時から有楽町
「ニュートーキー」本店7F桃杏
楼」で開催しました。参加者は一
次会38名、午後7時からの二次会
には35名が残り、午後10時から
三次会には函館からの柴田先生も
合流出来て、残った14名が再会を
果たしました。延々8時間余の楽

しい宴でした。

佐藤 昭次(71期・昭44年卒)
今春3月博士の学位を一橋大学
から授与されました。遅咲きの学
究生活は、50歳で入学した大学院
生活を満期5年で修了したことも
自信につながっています。長寿命
社会に向けた「生き直し」の申し
いスタイル確立に對してです。

殿谷 道子(71期・昭44年卒)
今年も参加できなくて残念でし
た。写真で皆さんのお顔を拝見し
て懐かしかったです。いつも通信
ごくろつまです。

中村 興治(71期・昭44年卒)
本年(二〇〇四年)5月に帰国
今回は恵山つじい祭を見に行き、
在校時の遠足等を思い出す旅とな
りました。この度の「洞爺丸」あ
りがとうございました。前号と合
せ通読し事故の全貌を理解できま
した。

目黒 容子(71期・昭44年卒)
いつもご連絡ありがとうございます。
長久保敏雄(73期・昭46年卒)
いつもお世話になっています。
これからよろしくお願いたし
ます。

城近 義行(77期・昭50年卒)
函館ハーフマラソン(9/26)
出走のために帰省した折30年ぶり
に音楽部の女性陣と再会でき、話
がはずみでした。つくづく地元は
良いなと思えました。

鈴木 達哉(77期・昭50年卒)
今年も会費だけで申し訳ありま
せんが。
瀬戸 隆(77期・昭50年卒)
10月1日付で成田営業所に所長

として赴任致しました。
一戸 昌則(78期・昭51年卒)
78期の皆さんお元気ですか、北
海道は駒大苦小牧、日本ハムと少
しずつ元を取り戻してます。
渡部 利文(83期・昭56年卒)

評議員会報告

平成17年度の理事会兼評議員
会は各期評議員34名の出席を得て
4月18日(月)午後6時30分から新
宿区軽子坂のインテリジェントロ
ビー・ルコにて開催された。

冒頭 金子支部長より、昨年度
親睦大会並びに事業活動におけ
る、理事並びに評議員のご尽力に
ついて謝辞のあと、本年度、母校
の百周年記念式典が10月に挙行
されるため、東京支部親睦大会を
9月に実施する旨の計画案、並び
に決算及び本年度予算について、
ご審議いただきたいとの挨拶があ
り、議案の審議に入った。

次に各担当より、前年度事業報
告及び今年度の事業計画の提案、
決算及び本年度予算についての説
明があり、質疑応答の後、原案に
て承認された。

東京白楊だより第27号のご送付
ありがとうございました。幹事の
方々に感謝しつつ盛会を祈ってお
ります。会員相互の一層の親睦と
融和の為に頑張ってください。
野澤 雅美(84期・昭57年卒)

最後に支部長より、東京支部親
睦大会の支援要請と母校百周年
記念の出席及び寄付について要請
があり、午後7時30分、全議案の
審議を終了した。
議案審議の後、同所において会
費制で懇親会を開催。

続 豊氏(43期)の発声で乾杯、
各役員から、年会費徴収の秘策等
について纏々意見が述べられ、午
後9時散会した。出席者30名。
審議の概略については次の通り。

- (1)平成16年度事業報告(金子支部長
小林副支部長 加納副支部長)
- (2)平成16年度収支決算案、並びに
大会開催 会報発行、本部及び他支
部行事出席、他校並びに郷土関係
団体交流、同好会活動(ゴルフ)等
内容説明。(会計担当片瀬理事)
- (3)年会費収入の減(前年比784名↓
662名 366千円) 会報送料の増
(名簿データ収集の増量) 名
- (4)平成17年度事業計画案
大会について担当...
- (5)平成17年度予算案(片瀬理事)
- (6)役員の変更(金子支部長)

会報をご送付いただきありがと
うございました。
関村 恒世(85期・昭58年卒)
会の充実をお祈り申し上げます。
事務局の皆様いつもありがとうございます。

- (1)簿データの作成関連費用等が増
要因。大会費、諸経費、ラベル作
成費用の削減の効果が見られた
が結果的に赤字決算。年会費収
入の回復が課題。
- (2)真船監事より適正と認めるとの
監査実施報告。
- (3)平成17年度事業計画案
大会について担当...
- (4)簿データにつき通常考えら
れるセキュリティをかける。
- (5)平成17年度予算案(片瀬理事)
- (6)役員の変更(金子支部長)

石月副支部長の退任につき後任
に加納理事(71期)を、理事と
して白川評議員(76期)を選任。
(理事 木戸正文(68期)記)

東京支部平成16年度収支実績 および平成17年度予算

収入の部	17年度予算	16年度実績
	H17/4/1 - H18/3/31	H16/4/1 - H17/3/31
年会費収入	2,500,000	1,986,000
寄付金収入	120,000	120,000
利息収入	20,000	27,012
大会収入	1,500,000	1,392,000
収入の合計	¥4,140,000	¥3,525,012

支出の部	17年度予算	16年度実績
	H17/4/1 - H18/3/31	H16/4/1 - H17/3/31
【事業費】		
会報印刷費	462,000	462,000
会報送料	333,000	522,918
会報諸費	8,000	8,668
大会費	1,285,000	1,200,862
大会諸費	250,000	312,408
名簿作成関連費用	300,000	188,930
インターネット関連費用	156,000	85,761
事業費 計	2,794,000	2,781,547
【運営費】		
消耗品費	5,000	41,022
印刷費	279,000	231,560
通信運搬費	132,000	29,335
会合会議費	74,000	57,867
理事会費	0	
評議員会費	100,000	95,074
本部派遣費	260,000	260,160
交際費	180,000	176,907
事務所諸費	300,000	300,000
会費払込料	60,000	46,130
雑費	2,000	4,159
運営費 計	1,392,000	1,242,214
支出の部 合計	4,186,000	4,023,761
差引収支残	46,000	498,749

交流いろいろ…同窓生著作紹介・趣味の会・函館巴会・ポプラ会…

心の病に冒されてゆく人が年々増加し、自殺者は3万人を上回り、(平成14年度警視庁調査、34,427人)、言わば荷員の横浜スタジアムの人場者数を越えるという大変な時代となった。

著者は「ストレスは、溜めない、逃げない、先送りしない一日決算主義で解消を。変えられない過去と他人に悩むより、現在と未来の自分を変えるメンタルヘルスの手法を今すぐ実践!。更にストレスがたまらなければ元気が湧いてお金もたまる!？」と説く。

ケーススタディを交えながら、吸った息は吐いてやるように、ストレスを如何に溜めないで逃がすか、もし辛くなったら、メールで相談すること等を著者の分かりやすく簡潔な文章で述べられている。是非皆様に一読頂きたく。

著者 山本晴義 (やまもと はるよし)
書名 生活人新書140
「ストレス一日決算主義」
発行所 NHK出版
価格 672円



山本晴義氏略歴

横浜労災病院勤労者メンタルヘルスセンター長。医学博士。認定産業医、公認スポーツドクター、産業カウンセラー。昭和41年卒・68期。専門は心身医学。健康教育学。自らジョギングなどによる、積極的なストレス解消を実践。

函中創立110周年記念
ポプラ会絵画作品展

白楊ヶ丘同窓会東京支部における親睦交流と同窓会の活性化を目的とし、本部、支部を問わず創作活動をされている同窓生の作品を展示し、希望者には頒布をする絵画他の作品展。

日時 平成17年9月6日(火)~12日(月)
11時~19時(最終日16時)

場所 ギャラリーコンセプト
東京都港区北青山3-15-16

オープニングパーティ 6日(火) 17時~19時
多数の参加をお待ちしています。

出品予定者 石渡悦子(60期)油絵 埼玉
佐渡谷安津雄(64期)油絵 函館
国井周明(63期)水彩画 函館
山崎康子(63期)洋画 東京
杉浦左知(64期)日本画 東京



第23回・11月19日・浦和GC

白楊ヶ丘同窓会東京支部ゴルフ会「第23回・24回ポプラ会」報告
理事 65期・菅原大作(65期)
白楊ヶ丘同窓会東京支部会員のゴルフ愛好者のコンペ「ポプラ会」は、年2回のプレーを続け、今年で12年を経過した。本年度も11月と5月の2回開催された。
第23回は、平成16年11月19日、埼玉県の浦和ゴルフ倶楽部で、6組24人が参加して行われた。この日は前夜から早朝にかけての猛烈な雨とスタート時から細かい雨による湿った芝とコース内に残るカジュアルウオーターの影響で快適なプレーとはならなかったものの熱戦が展開された。

成績は、ハンデ40に恵まれた堀内恵子さん(61期)が、並み居る強豪を押しつけて初優勝した。第2位は61期・長尾邦充氏、第3位は62期・幅敏暢氏。ベスグロは、44・45の同スコアの62期・合田京二氏と64期・佐古則興氏が獲得。女性ベスグロは、札幌から参加された64期・川原木和子さんが50・50で獲得された。
第24回は、平成17年5月19日に、平成11年5月の第12回コンペ以来連続開催してきた浦和を離れ、64期・佐古氏のご紹介により埼玉県江南町の太平洋クラブ&アソシエイツ江南コースで開催された。コンペは、4組14人と参加者は少なかったものの、初夏というよりは北海道なら真夏ともいえる暑い日差しと爽やかな風の中でプレーが行われた。
成績は、61期・正津禎男氏が優勝。2位は60期・水津秀夫氏、3位は59期・小林重行氏。ベスグロは、61期の金子公彦氏が46・42で獲得された。
ポプラ会の優勝者には、「二上賞」として、プロ棋士が対局中に使用する扇子に、ポプラ会会長の二上達也氏(日本将棋連盟顧問)が直筆で揮毫したものが贈られることになっていて、第23回は優勝の堀内さんとベスグロの合田氏に、第24回は優勝の正津氏とベスグロの金子氏にそれぞれ贈呈された。
なお、次回(25回)のポプラ会は、11月11日(金)を予定しております。コンペの案内状をご希望の方は、下記までご連絡ください。

「ポプラ会」・「巴会」報告

第九回 三校対抗函館巴会



第9回 函館巴会参加メンバー14名

ポプラ会コンペとは別に、平成9年から開催されている函館西、東両校の関東地区同窓会支部と行っている「函館巴会」コンペが、平成17年4月14日千葉県のデイスターGCで、西校・東校各13人、中部14人の10組計40人が参加して、西高の幹事で行われた。
成績は、個人が西の徳永豊吉氏。団体は、ベストスリーを独占した西が圧勝。中部は、優勝とは大きく差がつけられた準優勝に終わった。
なお、平成18年開催の次回は、中部が幹事当番校を担当することになっている。

ポプラ会申込み先
FAX: 03 3424 6854
63期・小林嘉則 宛

第29回親睦大会案内

2005年9月11日(日) 午後4時00分～

演奏会：午後4時00分～午後4時45分

懇親会：午後4時55分～午後7時00分

演奏会

演奏者

北海道教育大学岩見沢校教授

阿部 博光(昭和48年卒 75期)

阿部 佳子 ピアノ伴奏

内容

バッハ：ポロネーズとパディネリ

ドップラー：ハンガリー田園幻想曲

ピアソラ：タンゴ・エチュード

ジュナン：椿姫の主題による幻想曲

思い出

高校時代の思い出といえば、白楊会館にあった食堂のとなりで吹奏楽部の部室があり学校を休む日が有っても部活には必ず行って、フルートを毎日吹いていた事でしょうか。音楽家を志して上京し、その後、20年間を東京で過ごした事になります。その間、同窓会に



阿部 博光

(昭和48年卒・75期)

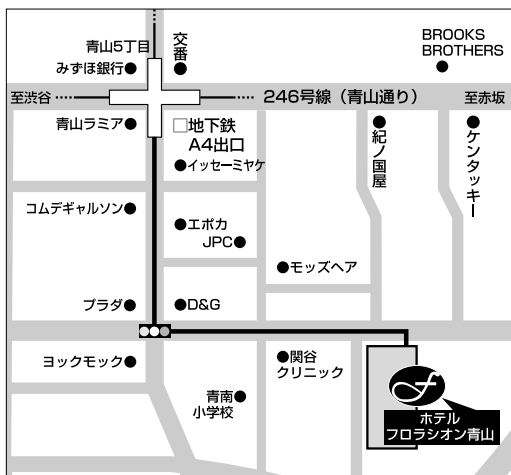
1976年北海道教育大学を経て東京芸術大学入学。同年第45回日本音楽コンクールフルート部門入選。1982年文化庁芸術家在外研修員として、スイスに留学。1948年より東京で10年連続リサイタルを開催。日本フィルでは、首席フルート奏者を務めソリストとしても活躍。1998年度札幌市民芸術祭大賞受賞。2002年札幌文化奨励賞受賞。現在、北海道教育大学札幌校、札幌大谷短期大学非常勤講師。HBCジュニア・オーケストラ常任指揮者

阿部佳子(ピアノ伴奏)

都立芸術高校、桐朋学園大学で学ぶ。卒業後パーゼル音楽院でチェンバロをフリップルクでピアノを修め、帰国後、室内楽をはじめ、オーケストラ鍵盤奏者合唱伴奏者などアンサンブルピアニストとして幅広く活躍している。特に、フルーティストとの共演が多く夫阿部博光とは長年に渡りデュオを組んでいる。現在全日本ピアノ指導者協会、カントリー、北海道桐朋会各会員。



ホテル フロラシオン青山 ご案内



◆ホテル フロラシオン青山◆

〒107-0062 東京都港区南青山4-17-58
電話：03-3403-1541

- 地下鉄/銀座線・半蔵門線・千代田線表参道駅 A4出口より徒歩約6分
- お車/青山通り246号線、青山3丁目交差点を西麻布方面へ進み最初の信号を右折

も参加させて頂いた事が有りましたがご無沙汰しております。今回の同窓会の幹事を同期の仲間が担当しているという事で、是非一緒に思い出深い会にできればと、願っております。

阿部博光

アトラクション

テーマ

『我が青春時代を
大いに語る』

それぞれが高校時代に戻り、その時代の学校生活・事件・風俗等スライドや新聞記事等をバックに青春時代を大いに語ってもらい、世代を越えて東京支部の会員交流の輪を同期だけでなく先輩・後輩間にひろげて世代間相互の親睦を図ると同時に同窓意識を高めたい。

・内容 各期の代表者に一人三分程度のスピーチ。

各期の代表者10名程度予定
(50期以前・55期・60期・65期・70期・75期・80期・85期前後・90期以降)

編集後記

26、27号で青函連絡船洞爺丸事故の特集を続けたところ、多くの方から興味深く読んでくださる声をいただきました。今号では知る人ぞ知る、函中出身の文学者が数ある中でも異色の俳人「青藤玄」を取り上げてみました。門下生でもあり後輩でもあった48期の本庄登志彦氏に私見という形でまとめてもらいました。今や俳句はブームだそうであるにもかかわらず、これを機会に俳句同好会を作ろうかと思っております。同好の志は事務局に御連絡を。

函中の特に旧制中学時代からはなかなか面白い人物が輩出しておりますが、随想に載せた『渡辺紳一郎』もユニークなタレント性で名声を博した先輩です。函館の文化の香りを漂わせて、『亀井勝一郎』とはまた一味が違った函館人じゃないでしょうか。

最近、時代小説の分野で活躍が目立つ宇江佐真理さんも70期の函中生です。今年5月発行の『たば風』は松前藩の話しが面白い短編小説です。いつかは特集で取り上げたいと思っています。

編集 K

東京白楊だより28号

- 発行 白楊ヶ丘同窓会東京支部
- 発行人 金子 公彦 (61期)
- 編集責任 小林 嘉則 (63期)
- 発行日 平成17年8月1日

【東京事務所】

〒160-0022

東京都新宿区新宿

TEL: 03-3352-6281
FAX: 03-3341-5048